

觀光地と自殺

——昭和八年、伊豆大島・三原山における投身自殺の流行を中心に——

今 防人

I、プロローグ——死の案内人

昭和八年二月一四日付『東京朝日新聞』は「三原山噴火口で女學生同性心中實踐學校専門部の二生徒一名は危ふく救助」の見出しで、實踐高等女學校専門部國文科二年生松本貴代子（二二）の三原山噴火口への投身自殺を報じた。記事の冒頭から引用しよう。⁽¹⁾

「大島元村特電」 一二日朝元村に入港した東京灣汽船菊丸⁽²⁾から上陸した女學生風の美人二人はすぐその足で白煙上る三原山への登山路をたどって行ったが一二日晝頃になってその内の一人の女學生は突如噴火口に飛込み自殺を遂げた同行の女學生風の娘は警戒中の人々に助けられ目下元村で保護中である。身許につき調査の結果飛込み自殺を遂げたのは本郷區駒込千駄木町一四、實踐高等女學校専門部國文科二年生松本貴代子（二二）、救

助されたのは埼玉縣忍町高女出身、渋谷區中通り三丁目一九佐藤方同級生富田昌子（二二）といひ大自然美の三原山上を死場所に同性心中を企てたものと見られている。尚急報により實踐女學校夫田教諭⁽³⁾と松本貴代子の實兄謙二氏が大島に急行する事になった

として、さらに同記事は続けて

非常に文學好き淑徳高女出の秀才

の小見出しで以下のように報じている。

自殺した貴代子（二二）は實踐女學校専門部國文科二年生で、昨年小石川の淑徳女學校を卒業した才艶だ、文學を好んで實踐女

學校の雑誌「相思樹」や「草の實」などに和歌を詠じてゐることもあり、又時としては李太白を眞似て自ら松本太白と號し漢詩を作ることもあつた自然美に對するあこがれはいたつて強く深夜ひとり月下を散歩することなどを好んでゐる

かつて學友と伊豆大島に旅行したが三原山についてはその後も口ぐせの様に讚美してゐたから、或はそれが自殺を誘ふたものではあるまいかと見られている、家出した十一日は紀元節の式をすまして歸宅し、友人のもとへ行くといつて、正午すぎ出かけたが、その時父市太郎氏（六九）は「親に心配をかけないでくれ」といつたところ、朗らかに笑つて「雲のやうなものです」と答へて

兄弟が經營してゐる本郷區東片町七九かねまん食堂へ兄謙二氏（三二）をたずね、そのまゝ大島へ行ったものらしいが死因については兄も分らないといつてゐる、父親市太郎氏は語る

信用の出来る子供であつたから平素自分は解放的態度でゐました、非常に讀書は好きだつたが讀書の中毒にかゝらぬやうにと注意はしてゐた、唯今電報を見たゞけで委細は分りませんが三原山の噴火口に投身するとは——或はあの性格ではやつたかも存じません

最後に同記事は

温和な娘さん

の小見出しで担任教師の話を紹介している。

實踐女學校受持教師池田先生談

私の方の松本貴代子さんである松本さんは一口にいへば極く優しい純日本風の娘さんで、學校の方は特に熱心でした、昨年姉さんが亡くなられた時丁度試験中でしたが登校された程で成績も相富です、學校は曾つて休んだ事がないのに同日（十三日）始めて休まれて變に思はれてゐますが、土曜日の紀元節の式には來てゐました。家庭はお母さんが無くお父さんと兄さんが居られるさうです

二月一四日付けの以上の記事で注意すべき点をいくつかを指摘しておこう。第一に見出しの「同性心中」に注目する必要がある。この「同性」は「女同士」ではなく「同性愛」の「同性」と考へるべきであろう。⁽⁴⁾

第二点として松本貴代子の性格を概ね、文學好きな優しく純日本風な女學生と紹介している点をあげておく。この観点は小説家吉屋信子によって支持されている。⁽⁵⁾但し、われわれとしては父親の「讀書の中毒にかからぬやうにと注意はしてゐた」との言葉に注目したい。戦後もしばらく文學に親しむものは、まっとうな生

き方からはずれたコースを歩むものとして世間から見られがちであった。また本人自身もそれを意識したスタイルをとることがしばしばあった。

さらに松本貴代子については、後述するようにモガではなかったかとの指摘があることに注意しておこう。

第三点として、何故、伊豆大島三原山だったのかという問題がある。この点については「かつて學友と伊豆大島に旅行したが三原山についてはその後も口ぐせの様に讚美してゐたから、或はそれが自殺を誘ったのではあるまいか」との記述に注目すべきである。今から六一年前に女学生しかもとりわけ裕福とも思われぬ女学生が伊豆大島に旅行している点である。このことは伊豆大島へのアクセスがかなり容易になっていたのではないかとの予想を抱かせる。

東京と伊豆大島の物理的距離は今も昔も変わらないが心理的距離は大いに異なると言えるであろう。知名度、交通機関の発達によって心理的距離は小さくなっていく。

二月一五日になると事件は一転して「獵奇的な」様相をおびてくる。

『讀賣新聞』二月一五日号は

「學友の噴火口投身を

奇怪！二度も道案内

實踐女學校専門部生の怪行動

三原山に『死を誘う女』

との大見出しで富田昌子が松本貴代子だけでなく、一月九日にも別の學友が三原山火口に飛込むのに立会ったと報じた。

「大島元村特電」噴火口に二度も親友を案内して死に誘った謎の女性の怪行動——渋谷區常磐松の實踐女學校専門部國文科生徒松本貴代子（二一）は自殺の目的で去る一二日級友富田昌子（二一）と來島して三原山に登山、數通の遺書を昌子に託したのち「グループのみなさんよろしく」との一聲を残して噴火口に投身自殺を遂げた。續いて昌子も噴火口に駆け寄り投身しようとしたが氣おくれがして躊躇しているところを折柄火口茶屋にいた元村在郷軍人兩官甚松（二四）⁽⁶⁾に抱き止められそのまま下山、元村警察署に同行された。同署で昌子を留置取調べると意外にも同女は既に去月九日にも學友を同噴火口に案内自殺せしめたことがあり今度で二度目の「死出の案内」を勤めたことが判明した⁽⁷⁾。

同記事は昌子の第一回の「死出の案内」について詳しく報じる。

「即ち去月八日同じく實踐女學校専門部國文科三年生本所區太平町七運送業宇恵喜杵次郎「宇恵喜は眞許の誤り『讀賣新聞』は翌二月一六日号で訂正——筆者」三女三枝子（二四）から「自殺をしたい」と相談を受け昌子が道案内となって東京から同行、三原山に登山し火口に至ったが三枝子が「貴女がゐては死ねないから歸

って下さい」といってきかないので昌子はふり返りふり返り山を下り三枝子は昌子の姿が見えるまで火口に立っていたがそのまま下山しないので投身自殺を遂げたものとみられてゐる、その際昌子と三枝子の間には『このことは五年間誰にもいはない』といふ約束があったが一日貴代子が昌子に自殺の意思を漏らした時、不用意にこの約束を破って三枝子のことを話したので『三枝子さんには案内して、私には案内出来ないの』と詰られた昌子は止むなく同行登山したものと判明した・・・」

事件は、片方が死に損ねた女学生の心中事件から、死の案内事件に変貌していく⁽⁸⁾。さらに『讀賣新聞』の同記事は、池田教諭の談話に

「同性愛なぞではない

昌子連れ帰った池田教諭談「傍点は筆者、以下同じ」との小見出しをつけて記者、読者の関心の一端を示唆している。

富田昌子は、アンチヒロインの役を振り当てられていく。『讀賣新聞』二月一六日号は、

「『死の案内』全貌判然す、

『死んでいった二人は

さぞ喜んでいよう』

昌子の『異常神経』

と題して前日の記事の内容を詳述している。しかし、二つの記事の間には、微妙な相違が見られる⁽⁹⁾。

第一に前者(二月一五日付)では

「三枝子が『貴女がゐては死ねないから歸って下さい』といつて聞かないので昌子はふり返りふり返り山を下り」

とあるのが後者では

「三枝子を噴火口付近においたまま一目散に逃げ歸ってしまった」

となっている。

さらに前者では

「『三枝子さんには案内して、私には案内できないの』と詰められた昌子は止むなく同行登山したものと判明」

とあるのが後者では

「この秘密を包み切れずにその母と死んだ貴代子に打ち明けたが、貴代子は去る七日昌子を枝庭のベンチに呼び寄せて『あたしも天國に行く日が近づいたわ、もう一度あたしを案内してよ。もしあたしと行かなければ、前のことをみんなに話すわよ』と脅かしたので昌子は驚いてこの秘密の漏洩を防ぐために、そのま

まふらふらと同行を承諾」となっている。

以上のように昌子のイメージは強く一面的に彩られることとなる。学友を二人も死出の旅に案内していながら「前後の文脈は省

略されているが」

「死んでいった二人はさぞ喜んでいよう」と平然と述べている。「異常神経の持ち主」であり、三枝子を噴火口に置き去りにして一目散に逃げ帰る、友情など無縁な女で、自己保身しか考えない人間と描かれている。

さらに「その母」に打ち明けられたと書いているが、読者が当然期待して然るべき母親の対応は出てこない。これは、日本の場合、現在でも、しばしば見られるように魔女狩りが決して本人だけにとどまらず、その家族にまで及ぶことの暗示以外のなにものでもない。

実際、二月一七日付『讀賣新聞』は

「世の親に警めの鐘、近代女學生氣質、三原山の浄火になんかえ、乙女は身を捧げたか」

という記事で、三枝子との大島行きのこと

「出發に先立って母親にすべてを打ち明けたが母は輕卒にも『そんなことは内證にしとかなければいけません』と言っただけで別段積極的に阻止もしなかった」と指摘したうえで

「大島署當局の懸命な活動にも拘らず『真相』を掴むことが困難であった大きな原因は地理的不便のほかには昌子の母親わかか昌子引取に渡島前本郷の松本家を訪問、眞許家とも連絡をとって両家の秘密を守り、昌子の非を蔽うことを約したのである」と断定している。

「天國に結ぶ戀」—— 序曲

さて二月一六日付『讀賣新聞』の「天國」という言葉に注目する必要がある。昭和八年当時、「天國」は独特のニュアンスを帯びていた。

前年の昭和七年五月八日、東海道本線大磯駅の裏手に当たる名もない丘(註)の草むらで若い男女の心中死体が発見された。

後日判明したところによると男は東京の調所男爵の甥で慶応大
学理財科三年の調所五郎(二四)で女は静岡の資産家の四女、湯山八重子(二二)だった。二人は恋仲だったが湯山家の反対で結婚できないことを悲観しての、昇永水による自殺と推測された。当時、この種の心中は、決して珍しいものではなかった。

発見された二体の心中遺体は当初身元が判らなかったので当時の規則に従ってひとまず町の無縁墓地に仮埋葬された。

翌朝、墓堀人夫の妻が線香をあげに墓地に行つたところ墓が曝かれて女の遺体は消え失せ着衣があたりに散乱していた。

ここに、なんの変哲もない心中事件は、センセーショナルで猟奇的な事件として一躍世間の注目を集めるに至つた。

地元の警察、消防ばかりか、八重子の郷里の消防団も駆けつけてあたり一帯の大捜査がおこなわれた。その結果、一一日午前、墓地から約三〇〇メートル離れた、ブリ舟をしまうブリ小屋の砂地から全裸の八重子の遺体が発見された。この事件は、当時のエ

ロ・グロ・ナンセンスの世相を背景に一大猟奇事件として満天下の好奇心をかき立てるに至った。

しかしながら、マスコミの事件の取り上げ方は一様ではなかった。心中事件の猟奇的な側面は捨象されて、もっぱら、美しい悲恋として染上げられていく流れもあった。そのための舞台装置もこの事件は備えていた。

華族の一族である慶大生、資産家の娘、二人の出会いが教会、男の母親は継母、場所は高級別荘地が点在する白砂青松の大磯——これらの要素が際立たされて美しい心中事件として徹底的に美化されていく。

マスコミは美しい心中事件演出に大きな役割を果たした。事件が報じられた時、旅先にいた松竹蒲田の五所平之助監督は直ちに呼びもどされて、この事件の映画化を命じられた。彼は約二週間で「天國に結ぶ戀」を撮り上げた。五所は次ぎのように製作方針を述懐している。

「この事件もともかくロマンチックな映画にしようと、その二人の純情な清い恋をうたいあげる、ということで作りました。．．．ほかでかなりリアリステックな映画に仕立てたところもありましたが、それはあまり受けなかったようです。私どもが受けて、その主題歌が今でも歌われているというのは、やはりロマンチックに作ったからだという気がします。」⁽¹²⁾

「天國に結ぶ戀」は、五所平之助監督、竹内良一・川崎弘子主演の松竹蒲田の作品であった。この映画は、西条八十作詞、林純平作曲の甘美でメランコリックな主題歌「天國に結ぶ戀」の大ヒットもあって各地で熱狂的な歓迎を受けた。大正・昭和の最大の作詞家・西条八十の手になる主題歌は若者を死に誘うプレリユードであった。

「天國に結ぶ戀」

一、今宵名残りの三日月も

消えて淋しき相模灘

涙にうるむ漁火の

この世の戀のはかなさよ

二、あなたを他所に嫁がせて

なんで生きよう生きられよう

僕も行きます母様の

お傍へあなたの手を取って

三、二人の戀は清かった

神様だけが御存知よ⁽¹³⁾

死んで楽しい天國で

あなたの妻になりますわ

四、今ぞ楽しく眠りゆく

五月青葉の坂田山

愛の二人にささやくは
やさしき波の子守唄

死へ誘うメロディー、ひたすら心中を美化するストーリー、シーンが若者に与える影響に危惧を抱くものは少なくなかった。

六月一〇日の封切直後、一日の『東京朝日新聞』の「新映畫評『天國に結ぶ戀』」は、脚色、カメラワークをほめたのちに次ぎのような危惧の念を表明している。

「・・・余りにも効果的な心中禮讃の態度の故に少年少女の觀客に与えるであろう影響を恐れたい程である。事実この映畫にもっとも考ふべき点はこの点にあるのかも知れない。」

不幸にしてこの危惧は的中した。坂田山で心中するものが続出、果ては、この映畫を見ながら心中するものさえ出てきた。映畫のイントロで主題歌が流れてくると、手に手を取って昇永水をあおるカップルが現われたため県によってはこの映畫の上映を禁止したところもあった。

坂田山心中は紛れもなく、伊豆大島の三原山を中心とする自殺・心中ブームのプレリウドであった。

坂田山心中を一つの引き金とする、このおぞましきブームを數字によって見てみよう。昭和八年四月一五日付『東京日日新聞』は警視庁下での心中とりわけ情死の激増を報じている。

「数日前でできた警視廳管下昨年中の自殺總數は二千三百五十七件〔内地總數は一万四千七百四十六件、『帝國統計年鑑昭和九年版』、内閣統計局 — 筆者〕で前年度に比較すると五百七件の激増、その中失戀、情死等の愛慾關係が三百三十四件で、特に情死は一昨年の六十一件に比し約二倍強の百四十八件、次は例の諫死で近親者の行状を見るに見かねての自殺が六十八件もあった。注意すべきは自殺者の大半は十六歳から三十歳までの青年男女で占められている事だ、それではこれを救う道はないのか？」

敢えて言うならば昭和七年から八年にかけて新聞、雑誌、映畫、歌謡曲などのメディアでは「心中」、「情死」、「天國」の言葉が乱舞していた。

〈マスメディア小考〉

ラジオは既に契約世帯數一〇〇万を突破していた。新聞とは異なりラジオはその当初からはば政府の統制下にあった。ニュース番組はとりわけそうであった。NHKの独自のニュースは少なく、

放送局、各新聞社、警視庁（J O A Kの場合）などにより製作された。

政府の統制力が強いラジオは受信機そのものが高価であったため普及は決して順調ではなかった。メディアとしてラジオは無視できない存在であったが、三面記事の情報はやはり主として新聞、雑誌により伝播され、それを映画、歌謡曲が補強、増幅する。

映画の映像が多数に与えた影響は極めて大きい。さらに映像と相補関係にあるものとしての音声、歌謡曲が挙げられる。歌謡曲の普及にラジオが果たした役割は大きい。事件そのものの報道に接する場合にもわれわれは自分の眼鏡（準拠枠）によって解釈、評価する際、この眼鏡を前もって純化するのが映画、歌謡曲だとすれば、直接的な報道禁制は、あまり意味を持たないであろう。歌謡曲の普及に貢献したのはラジオばかりではなくレコードが挙げられる。レコード盤自体も高価であったが、昭和初期とりわけ一年までのレコードの売れ行きは著しい伸びを示した。

昭和四年に生産枚数が一〇〇万枚だったのが七年に一七〇〇万枚、八年、二四〇〇万枚、一年には二九〇〇万枚となった。

さて以上を背景に考えてみると、新聞は「同性心中」から「死の案内」へ関心の焦点を移そうとした。また移すことにより、教化、親・家族の責任、本人の「異常性」や弱さにアクセントを置こうとした。しかし、このような変更もすでは高まっていた自

殺・心中ブームを増幅させる効果の方が大きかったと考えられる。

二月一五日の『東京朝日新聞』は、大島に妹・貴代子の遺留品を引取り帰宅した謙二の談話として次ぎのように報じている。

「ろばの馬子が目撃した話では朝の陽を正面にうけて紫のお召しを着たまま飛込んだのでたもとほひらき黄煙に映えてまるでせみがとんだ時のようだったそうです」

さらに同じ記事には、死体を人目にさらすことをひどく嫌がっていた貴代子は

「三原山の煙を見たら私の位牌と違って下さい」

という言葉を家出する数日前に父・市太郎と戯れの内に言い残したとある。

聖なる御神火のけむりとなって天に舞上がるイメージは鮮烈である。

「三原山の煙、私の位牌」は当時の斬新なコピーとも言えよう。松本貴代子の性格について詳細に述べることは今や不可能であろう。しかし、前述の吉屋信子や池田教諭の評価のように「古風な純日本風」はあてはまらないように思われる。

このコピーや「グループのみなさんよろしく」の言葉にとどまらず、大島行きの数日前に親友を集めて「形見分け」（富田昌子

以外の者には座興ととられた)をしたり、しばしばダンスホール
に出入りしたことなどの点から見ると、けばけばしくはないが一
種の「モガ」と思われる。

さらに、もし貴代子が「帝大の文科の學生と戀愛關係にあつた」⁽¹⁸⁾
「富田昌子の言」ことが事実とすれば(肺病を患っていた)「三枝
子さんの時とは違って、貴代子さんの場合は、死ぬと云う原因が、
何だか、薄弱だと思われる」(同上)ことになる。案外、父親の「あ
の性格ではやったかも存じません」との言があたっているかもし
れない。

すでに「死の季節」を迎えていた昭和八年、三原山事件に飛び
ついたのは新聞だけではない。婦人雑誌を中心に雑誌界も一斉に
取り上げた。主たるものを拾ってみよう。

『婦人世界』、四月號、「御神火は招く——三原山女學生自殺
事件の全貌」と題して一大特集を組んでいる。同誌は事件発生
後、いち早く大島に記者を派遣精力的に取材を続けた。この巻
はほぼ全巻をこの特集に割いている。

『婦人公論』四月號、「少女達と死——家庭の罪か、社會の罪か」
と題して特集を組み、三原山事件とほぼ同時期(二月一六日)
に起こった民政党前代議士の令嬢櫻内本子の自殺を取上げてい
る。

『婦人倶楽部』四月號、「三原山に消えた女學生自殺の真相」

『主婦の友』四月號、「三原山自殺の女學生」

『ギヤング』四月號、「三原山心中・祕話」

『モダン日本』四月號、「三原山乙女自殺の真相」

五月になっても各雑誌は三原山事件にニュースバリューを見て
いた。

『婦人公論』五月號、富田昌子、「三原山事件の真相」

『ギヤング』五月號、「三原山の同性心中裏のうら」

『改造』五月號、林芙美子、「三原山紀行」

六月號になると三原山事件に新たな傷ましい展開の記事が加わ
る。

二月一五日以降、郷里に逼塞し、嵐のような糾弾に耐えていた
富田昌子は四月二九日に急死した。公表された病名は脳底脳膜炎
であった。

富田昌子が世間の非難を受けた一因は、彼女の「不遜な」「強情
な」とも誤解を招く性格にあつたように思われる。兩宮甚松の前
掲手記には、そうした昌子の印象がよくでている。

又、池田教諭は、筆者に「変った人でした」と手紙で語ってい
る。

なお池田教諭によれば、富田昌子の処分を廻って家政系教師と
国文系教師のあいだに激論が戦わされた。即刻、退学を主張する

前者に対し、後者は「更生の機会を与える」と最後までがんばり、親元に置くという事実上の休学で結着したという。

当時、昌子の母親が實踐に出向き、昌子の退学処分を強更に申し入れたという説もある（山本露敏、「死の三原山案内事件秘録」が定かではない。

富田昌子の死により、わずか五ヶ月間で、三原山女學生死の案内事件の当事者三人は、全て死んだことになる。この国では死者に鞭打つことは許されない。死者の鎮魂が始まる。

『婦人公論』二月六日号、富田廸夫、「世に虐げられた愛妹昌子を憶ふ」

『婦人倶楽部』六月号、「(亡友の御霊を追って死んだ)三原山哀愁歌の昌子さん」

当事者三人の死により、「三原山患者」「御神火亡者」の列が途絶えたわけではない。社会はこれらの隊列をひたすら延長することに躍起となっていた観さえある。

昭和八年一年間で火口に飛込んだり、島内外で自殺・心中したもの二百数十名、未遂で警察に拘留されたもの六百数十名の隊列は動き始めていたのであり、この事件後、ますます加速されていくであろう。

II、自殺のトポス・伊豆大島三原山の成立

——何故、大島三原山か？

松本貴代子が三原山火口に飛込んだ二月二日、正確には二月四日付『東京朝日新聞』が事件の第一報を報じてから、伊豆大島・三原山は、にわかには自殺のメッカとして脚光を浴びてくる。しかし、何故、昭和八年に伊豆大島・三原山が自殺の名所として全面的な注目を集めてくるのであろうか。

1、御神火の島から詩の島へ

伊豆大島は

「帝都ヲ隔ルコト六十六哩五、東京灣口と下田港トノ中間（下田大島間八十六哩）伊豆半島河津ノ正東十六哩ノ相模灣上ニアル周囲十二里六丁、東西二里十八丁、南北五里、總面積約六十六里ノ小島ヲ海拔二千五百尺ノ活火山三原山ヲ中心ニ錘子状ヲ為シテ居ル」⁽²⁰⁾

すなわち、東京から約一〇七キロの海上にある伊豆大島は、現在では首都圏の人々にとって物理的にも心理的にも決して遠い存在ではない。飛行機を利用すれば三〇分、船でも四時間二〇分、

新幹線で熱海まで行き高速艇に乗れば一時間五四分で着く。⁽²¹⁾

しかし、江戸時代はさておいても明治も三〇年代までは、大島と東京の距離は現在からは想像できないほど遠かった。松木國次郎は、この「帆船時代」を回顧して次のように語っている。⁽²²⁾

「其の航海の役目に当たった船は真帆一本檣の親船と云った四、五百石積位が優秀船で島の主産物薪を積み出す船であった。明治の半頃にはこれ等の船が全島で十隻位あった。稍小型で二百石積位のとうかいと云うのが七、八隻もあつたらう、海産物の運搬船には肩「和船の最も幅広いところの横幅——筆者」七、八尺の押送り或はまま余肩七尺位のヤンノウ「やんのうぶね、外房州などで鮪延繩（まぐろはえなわ）漁業に使われた和船」によつた。これらの運搬船には帆ばかりでなくろも遭がれることになつている。」

明治になつても洋式蒸気船はおろか、洋式帆船も地方航路ではなかなか導入されなかつた。松木は次ぎのように続ける。

「帆船は主に順風を利用するもので逆風には殆んど無能力であるも、強い風でなければ風を横に受け左右と往復して漸次風上に乗り出すのでこれは『まぎる』と云う、親船は一番まぎりが利かず漸く一点位しか向かない・・・押送りはまぎれの利いた

船で速力も早いので多く鮮魚の運搬にあつた。風のない時は大島から東京へ七丁ろで一四人位の血気の猛者がエーヤエーヤのろ声勇ましくこぎ渡つた・・・」

当時、客船というものは東京大島航路には存在しなかつた。同じく松木によると

「客船と云うものはないから東京へ往復の場合は此の荷船に乗せて貰つて、それを便船乗りと云う親船にはかむろと云つて天井のある室があつたので雨でも凌がれるが、小船は苦でも破つてしゃがんでいりより外ない、それに時々波が打ち込み濡れる位は普通である、途中風が風ぎたら困るのでこんな時は潮流に随いながれていりる。」

七月頃毎日南風ばかり吹く所謂ながし時にでもなると三崎辺りに碇泊し日待ちして大島の空を眺めているばかり、そうして時には半月以上も動けないときもある・・・」

したがって帆船時代の

「東京ひと航海（ひと上下と云つた）は順よくて押し送りが四日其の他は十日位、親船は一五日かかつた。明治三十年頃より殆ど片帆の西洋型帆船に改造され其の日は短縮されたのであ

る。」

以上のような交通事情を考えるならば、首都圏の多くの人々と、伊豆大島が依然として、鎮西八郎為朝が流された島、流人の島と映ったことは想像に難くない。

しかし、明治三〇年代後半から交通事情は徐々に変化を見せてくる。その変化の主役は東京灣汽船（現東海汽船）である。⁽²³⁾

東京灣汽船会社は、当時、東京府会議員で実業家の渋沢栄一の構想と、協力、指導の下に、東京、浦賀、横須賀、三崎、木更津その他房州の諸航路を運営していた東京平野汽船組合、第二房州汽船会社、内国通運会社の四社が合併して出来たものである。創立は明治三二年一月一日だった。創業当初の航路は東京灣、房州に限られていたが二年後の明治三四年には伊豆航路に乗り出した。東京——熱海——網代——伊豆——稲取——貝高——下田に寄港し、月一、二回程度の航海だった。またこの年には東京府の要望により、年二、三回、印材であるツゲの輸送を主目的とした御蔵島航路を開始している。これは東京灣汽船が伊豆七島に船を向けた最初の航路であった。

外房航路、伊豆航路と東京灣外に進出した同社は同年、外房航路を小名浜にまで延長し磐城航路を開始している。この磐城航路は、明治三一年塩釜を中心とする三陸航路に拡大され、三陸航路は明治四四年、地元の三陸汽船に譲り渡すまで採算航路として重

要なものであった。

伊豆航路は、天城丸（一六四トン）、天竜丸（二七五トン）の二隻の高速新船が明治三〇年に投入され、従来約二〇時間かかっていた東京——下田間が、ほぼ半分に短縮された。明治三二年には、東京——下田航路が月三回新島にまで延長された。伊豆七島への航路は明治三三年に、東京——御蔵島航路を月一回に増便し、新島、三宅島に寄港させることとし、さらに東京——三宅島——御蔵島航路が、逓信大臣より郵便物質輸送の命令を受けることにより、さらに強化された。

また明治三三年には東京渡邊銀行（当時の行名は二十七銀行⁽²⁴⁾）の渡邊一族が経営に参加し、昭和二年に一族が総退陣するまで経営の中枢にあった。

明治三四年には同社初の鋼船東洋丸（二八五トン）が三陸航路に配船されている。三陸航路は翌三五年に北海道にまで延長され、北海道航路が開発された。

明治三七年から三九年にかけて伊豆方面への進出は飛躍する。三七年に、東京——下田航路を経営していたライバル、東豆汽船を吸収合併した。翌三八年には、東京——横浜——国府津航路と、国府津——小田原——真鶴——吉浜——熱海——網代——伊東航路（時には大島まで延航）を経営していた相陽汽船を買収。三九年には下田沿岸——（各沿岸地点寄港）沼津航路を経営していた豆州共同汽船を買収し、下田——松崎——清水航路を開始した。

ここに東京湾汽船は東伊豆一帯の航権を独占し、西伊豆に進出することになった。

明治三十九年、買収した相陽汽船に代って、伊東——大島航路を開始する。これが大島定期航路の嚆矢となった。

明治四〇年は、東京湾汽船にとり画期的な年となった。五月二五日、東京府知事との契約により、次の命令航路「政府や地方公団体が補助を与えて運航を指定し、命令する航路」を開始した。

①東京——大島——利島——神津島——三宅島（三宅島線）毎月一航海。

②東京——大島——利島——新島——式根島——神津島（神津島線）毎月三航海。

③東京——下田——新島——式根島——御蔵島、東京——三宅島——御蔵島（共に御蔵島線と称す）毎月二航海。

④東京——大島（大島線）毎月三航海。

補助金は年七五六〇円であった。又、同日付で、伊豆諸島（大島、利島、新島、神津島、御蔵島）の各島代表と協定を結び、各島の寄港回数を、大島年九六回以上、新島年六〇回以上、三宅島年三六回以上、神津島年二七回以上、御蔵島年五回以上と定めた。

さらに御蔵島に次いで他の伊豆諸島各命令航路について通信大臣より郵便物輸送命令を受けた。

六月一日には、命令航路の第一船として、豆相丸（二三三トン）

が、大島に向けて東京湾汽船を出帆した。東京湾汽船のドル箱となる大島航路の第一便であった。

伊豆諸島への航路は明治四三年八丈島、同四四年青ヶ島へ延航されるにいたり、伊豆七島全島に及ぶことになった。（三宅島寄港八丈島命令航路は大正一五年）

明治末から大正を通じて東京湾汽船は、命令航路の運営を中心とし、沿岸航路から逐次撤退をはかる方針をとった。

東京湾汽船が従来の経営方針を大転換し、大島を一大観光基地化する努力に踏切る転機は昭和二年三月一四日にやって来た。

この日、第五二議会議院予算委員会で答弁に立った片岡蔵相は

「現に今日正午頃東京渡邊銀行が到頭破綻を致しました」

と発言した。この片岡発言が金融恐慌の引き金となったわけである。この時間東京渡邊銀行は休業も破産もしていなかった。事実上の経営責任者であった渡邊六郎専務は金策に奔走していた。彼は一月二九日に東京湾汽船会社の社長に就任したばかりであった。

創業以来四〇年間、大株主であり、明治三三年からは経営のトップの座を占めてきた渡邊一族は、昭和二年二月一五日の臨時株主総会で総退陣した。第七代社長には中島久万吉、常務取締役

には林甚之丞が就任した。新経営陣は金融恐慌の嵐に立ち向かうことになった。

新経営陣の対応は素早かった。新しい経営方針の基本は、従来の貨主客従の運航から客主貨従への転換と伊豆七島なかでも大島の観光地開発にあった。

第八代社長となった林甚之丞は往時を振り返って次のように述べている。⁽⁸⁾

「私共が大島の紹介に手を染めたのは昭和三年であります。如何にも近來都會集中の勢が段々激しくなって参りますにつれて、市民の保健問題、思想問題、其他色々な問題がございますが、斯う云う問題に着目して聊か國家に対してそういう方面に付て貢献を致したいと云うことが動機でありまして其の中でも兎に角海上行楽と云ったようなことが市民にとって・・・重要なものの一つであろうと云うことを考えまして、此の海上行楽の見地から大島開發に手を染めたのであります。」

海上行楽のイメージは、明確ではなかったが

「兎に角大島を終点とする東京よりの海上航路全体を所謂海上行楽地としよう」と云うようなことを其の時考えたのであります。」

林は常務取締役就任後、二週間あまりで大島に視察に行く

「そうして昭和三年の正月二日に初めて大島に上陸したのであります。それから三原の山頂まで登ったのであります。登って見ますと實に驚くべき山でありまして・・・私は非常に感激しました。實に雄大な景色でありまして、此處に都會人種がお出になつて、そうして此の雄大な氣分に接触させただけでも我々の目的の大半が達し得るのではないかと云うようなことが動機であつたのであります。」

客主貨従の運航方針への転換策として、まず第一に、現有船舶のうち老朽スチーム船が、全て新型ディーゼル船に切替えられた。当時、東灣所有の船は二八隻だったが、明治二四年頃製造のものもあり、「皆ボロ船」だった。切り替えは迅速に行われた。

昭和三年には老朽船七隻を廃船処分とし、三隻を売却、橘丸(三九二トン、大正一二年就航)と櫻丸(三九七トン大正一一年就航)を純客船に改造し、新たに、東京——大島——熱海——下田航路を開設した。

昭和四年に八隻の新造船が完工している。その内訳は貨物船二隻、客船三隻、貨客船三隻となっている。

新造船への切り替えは急ピッチで進み、昭和八年、大型客船葵

丸（九三七トン）の完工、東京——大島——下田航路就航により第一期拡張計画は終了し、この間、他社への譲渡もしくは廃船された老朽スチーム船は二一隻、新造船は二六隻にのぼった。

この間、早くから船室改造も着手されている。

「船室の等級を撤廃して、すべて同等とし、現在の甲板上の上級室をこれに充て従来^⑧の三等客室の位置には食堂等の設備をなしお客本位とし愉快な旅の出来るようにする。」

航路の充実も積極的に推進された。昭和三年四月一日から、島民待望の東京——大島——下田の毎日の定期航路（日航）がスタートした。この航路には前述の純客船に改造された櫻丸と橘丸が就航した。

さらに昭和四年四月からは波浮港を終点とする貨客船の日航が開始された。

「今日四月より東京灣汽船会社に於いては、遊覧船日航の外に波浮港村民多年の要望により同村より一ヶ年三千圓の賠償的補助を得東京を起点とし波浮港を終点とする生魚及一般貨物を運搬する日航を開始することに決定し郵便物また之に付随して毎日託送され・・・^⑨」とある。

東京灣汽船会社の積極経営に大島側も応えていった。正確には東灣のイニシアチブに引きずられたと言ってよい。同社は三田尾

取締役の名で昭和三年三月一六日付の『島の新聞』に次のような書簡を掲載している。

「・・・兎に角大島への毎日定期航路は四月一日より實施のことは過日申上候通りに御座候、其他、野球場、トラック、テニスコート、水泳場、ご樂場建築、湯場経営等多種計画に附昨八日重役會を開催し、山本技師より道路及用水問題につき、戸野技師より遊園設備につき説明し、小生は産業及ご樂両方面より見たる島全体につき意見を述べ・・・尚御依頼申せし道路工事は此際火急御着手被下様呉々も諸兄の御盡力切望に堪えず候、先は右まで申上度如斯御座候」

そして大島側は、多年の懸案であった島内各村貫通道路に着手する。同年三月には元村——岡田間の馬の瀬線、新橋——野田間の海岸線の工事がスタートした。さらに同年には差木地——間伏間の海成した。昭和四年には元村——野増間が開通し、野増——間伏間の改築がなされた。茶屋、旅館などの新設、改築もすすんだ。

東京灣汽船の大島航路の隆盛は、企業の積極経営によるところが大であるが、いくつかの幸運に恵まれたことも否定できない。

その一つが昭和四年五月三〇日の昭和天皇の行幸であった。昭和天皇は皇太子時代の大正七年六月一日に大島に行啓している。昭和四年の行幸は、当初昭和三年に計画され、三月中旬に来

島の内容が発表されたが、天皇の健康問題などで四年に延期されていた。

行幸が、その地方に社会的経済的な変革をもたらすことは戦前も戦後も同じである。長年破損状態にあった橋は、一夜にして架けられ、デコボコの道は突貫工事でもたたくまに補修される。

流産に了った昭和三年の「行幸」の時でさえ、大島では元村外五箇村組合會が直ちに、約五〇〇〇円の奉迎予算を全会一致で可決している。

その内容は

「奉迎諸費	二五五〇円
献上品	三〇〇円
事務費	四五五円
湯場御休憩所設備費	一〇〇円
道路技術員旅費	八二円
行幸記念碑建設費(三ヶ所)	一〇〇〇円
雑費	四〇〇円
(記念誌編纂記念品頒布) ⁽²⁹⁾	一〇〇円

行幸は、ほとんど常に土木事業をとまなっているものであり、全

国の「行幸道路」は多数に上るであろう。大島も例外でなく、三原山山頂から差木地にいたる道路は行幸道路と呼ばれた。

さらに行幸は、現在の価で何億円もの宣伝価値があったと考えられる。マスコミによる連日の報道は、行幸の地域を様々な角度からクロローズアップして紹介する。さらに行幸後には様々な聖蹟が生まれ、名所旧蹟に変貌していく。

昭和四年の行幸後、三原山頂で天皇がとったポーズで記念撮影するのが流行した。

なお天皇にとり大島は思い出深い地だったのか昭和三五年四月五日、同六年にも訪れている。

東京灣汽船会社は、大島航路の充実と宣伝強化をはかっていく。『社史』から二、三引用しておこう。⁽³⁰⁾

「昭和五年三月七日、京橋の角、第一生命ビル一階に京橋案内所を開設、航路の宣伝、船客取扱事務を開始する。伊豆諸島を中心とする観光宣伝の街頭進出の初めであった。同年三月一日、本社汽船発着所内及び各船内の食堂は、従来請負制度であったが、これを直営に改める。

昭和六年七月五日、旅客誘致の目的のため、下田に「ヒュッテクロフネ」を開業(下田温泉ホテルの前身)」

さらに地元への利益還元かコングロマリット化を目指したのか定かではないが、昭和八年一月には「伊豆七島に適する植物栽培研究のために」元村に敷地六万坪の東京灣汽船産業研究所を創設した。(同研究所の施設並びに用地は昭和二年九月一二日、東京都に寄付され、現在の東京都立大島高校の敷地となる。)

明治の末から大正にかけて文筆家を中心とする文化人が大島をぼつぼつ訪れるようになった。明治四二年一月には、井上円了博士が訪れている。小説『波』(のちに『若き日の悩み』と改題)を書き、大島を背景に青年の悩みを描いた藤森成吉が大正二年に来島している。その後、大島桂月(大正六年)、荻原井泉水(大正八年)、巖谷小波(大正九年)と続いている。それらの文化人は和歌、俳句、紀行文などで大島をとりあげている。⁽⁸¹⁾

東灣は、この点に注目した。文化人、とりわけメディアに影響力を持つ文化人を動員して大島キャンペーンをはってもらうことを考えた。また名士の来島自体がキャンペーンとなった。

経営方針大転換後の昭和三年六月一八日には当代随一の文筆家、徳富蘇峰を招待している。蘇峰は一八日から二五日まで島内各地を周遊し、「大島遊記」を書いた。⁽⁸²⁾

引き続き作家の十一谷義三郎、洋画家の中川紀元を招き、昭和四年八月二六日には、西条八十、中山晋平を招き、島ぐるみで歓迎している。

「東京灣汽船の招待により西条八十、中山晋平、百束氏それに灣汽船支配人菊池氏一行二十六日來島、波浮港一泊、三原登山の後、二十七日午後、為朝碑前に於て市廳より市廳長・坪氏、元村役場より藤井村長並びに白井収入役、小學校より校長、白井主席訓導、灣汽船元村扱所より山田長男氏、島の新聞より柳瀬社長、那知編集子出席一行の送別宴を催した」⁽⁸³⁾

同年九月二十三日には、徳田秋声、近松秋江、小川未明、中村武羅夫、中川紀元、堤寒三「漫画家」、林俊衛「洋画家」、『週刊朝日』主幹翁六溪の八氏を招待している。⁽⁸⁴⁾

昭和三年五月、ビクターは、作詞野口雨情、作曲中山晋平、唄佐藤千夜子で「波浮の港」を発表した。

波浮の港

磯の鵜の鳥や 日暮れにやかへる

波浮の港にや 夕やけ小やけ

あすの日和は ヤレホンニサ なぎるやら

船もせかれりや 出船の支度

島の娘たちや 御神火ぐらし

なじよな心で ヤレホンニサ いるのやら

島で暮すにや とぼしうてならぬ

伊豆の伊東とは 郵便だより

下田港とは ヤレホンニサ 風だより

風は潮風 御神火おろし

島の娘たちや 出船の時にや

船のともづな ヤレホンニサ 泣いて解く

磯の鶉の鳥や 沖から磯へ

泣いて送らりや 出船もにぶる

明日も日和で ヤレホンニサ なぎるやら⁽³⁵⁾

東京灣汽船は

「波浮の港」が「今で言うヒット曲であった。そして、この曲のイメージは、直接、大島と結びつき、大島への関心と呼んだ」

として歓迎した。⁽³⁶⁾

しかしながら、波浮の港の大ヒットは、映画との相乗効果の産

物であると指摘されている。倉田喜弘は昭和三年中のレコードの売れ行きは一曲種最高五〇〇〇枚だったのが四年には一桁違う五万枚に跳ね上がった原因を、歌謡曲の映画化に求めている。⁽³⁷⁾

波浮の港は河合映畫(昭和三年一月)、帝キネ(同四年三月)、日活(同年同月)、東亞(同年三月)の各社で映画化された。

ラジオとの相乗効果も当然予想されるが、現在のところ数字はほとんどない。

大島節については昭和四年三月一五日、島の娘三人が日東レコードに吹き込み、一七日にはJ O A Kから放送されている。⁽³⁸⁾

民謡ブームは昭和七年二月二〇日に、八年一月新譜として発売された「島の娘」で一つの頂点を迎えた。

唄い手の勝太郎は長い間、ビクターのドル箱歌手となる。島の娘は一説には、わずか半年間で五〇万枚売ったと言われている(倉田、前掲書)。

島の娘は映画会社により次々に映画化される。松竹、日活、河合、大衆映画、新興キネマの五社が映画化し、この大ヒット曲が全国を席捲するのを大いに助けている。

「島の娘」は名実共にマスカルチュアとしての流行歌の成立を示す指標となった。

島の娘

長田幹彦作詞、佐々木俊一作曲

勝太郎唄

一、ハア 島でそだてば 娘十六戀ごころ
人目忍んで 主と一夜の仇情

二、ハア 沖は荒海 吹いた東風が別れ風
主は舟のり 今じゃかえらぬ波の底

三、ハア 島の灯も 消えて荒磯のあの千鳥
泣いてくれるな 私しや悲しい捨て小舟

四、ハア 主は寒かる 夜ごと夜毎の波まくら
雪はちらちら 鳴いて夜明かす磯千鳥⁽³⁹⁾

ところでこの歌詞から見る限り「島」は特定されていない。事実、昭和八年七月一日に全国陸上競技連盟主催、日本ビクター蓄音機株式會社後援の

「陸上オリンピック八年計画基金のための日本ビクター實演大會」(於日比谷公會堂)

のプログラム第三部には、「流行歌劇・島の娘(一幕三場)」とあり

「プロローグ 勝太郎・徳山璉、四家文子、小林千代子、藤山一郎、を主演として書卸された、微笑、媚笑、非恋、哀恋の名脚本、流行歌劇。こればかりは何處でも見られぬ、何處でも聞かれぬ」とした上で

「場所、或る北國の漁場に近き島(傍点筆者)とされている。⁽⁴⁰⁾

つまり、ビクターでも、「島の娘」の「島」は伊豆大島とは特定されていなかった。敢えて言うならば、勝太郎が新潟から東京に出て来て新顔芸妓としてオデオン・レコードから新民謡「佐渡小唄」と俚謡「佐渡おけさ節、山中節」を出したことを考えるならば「北国」からは日本海の島、佐渡あたりが連想される。

しかし、「島」はいつの間にか「伊豆大島」に特定されていく。時代は少し下るが、昭和十一年八月には「島で育てば娘十六戀ごころ」の歌碑が三原山滑走場の終点アヂコ亭付近の景勝地に建設され島の名所となる。八月三日には除幕式が挙行されている。

来る筈の当の勝太郎さんはビクターとキングレコードの間にはさまって姿を見せなかったが、唄の碑のてん刻を引うけた一條公

爵をはじめ猪毛政務次官、東京灣の林社長、アナウンサーの松内、落語の柳家小さん、漫画の宮尾しげを等々各方面にわたって七百名ばかりの來賓が東京からわざわざ押しかけて参列、島の有志百名ばかりが加わり、式は林兩太氏のあいさつ、講談社代表の讃辞、赤坂林家半玉雪彌さんの除幕、一條公が來賓を代表して祝辞を述べて終わったが、東京芸妓や島のアンコの手踊り等の余興があり盛大を極めた。⁽⁴¹⁾

さて、「島の娘」は前述のように五社が映画化している。トップを切ったのは大衆映画社で昭和八年八月に新宿劇場で封切りされている。この映画のスティール写真が『讀賣新聞』昭和八年三月一日に載っているが、そこには明らかにアンコ姿の女優、岡田葉子が写っている。

「島の娘」は、芝居にも登場した。『讀賣新聞』昭和八年四月二八日（夕刊）にはムーラン・ルージュの次の広告が出ている。

「四月二八日替りのムーラン・ルージュ

プログラム

一、島の娘後日譚 五景

二、僕の青春 三景

三、ヴァラエティ 一二曲

四、商船太平洋航路 八景」

大島観光の展開、「島の娘」の爆発的なヒットそして、紛れもなく、二月一二日の松本貴代子、真許美枝子の投身自殺を口火とする三原山の自殺・心中ブームにより、大島、三原山を題材とする流行歌が昭和八年を通じて次々に制作され、歌われる。次にそのいくつかを挙げておこう。

・「椿咲く島」 鹿山映二郎作詞、竹岡信幸作曲、松平不二男独唱
(キングレコード)

広告には次の宣伝文がつけられている。

「問題の三原山哀傷篇、驚異的人氣の流行歌、椿咲く島の娘ごころを唄った竹岡メロディーの懐かしきリズム、致る處、怒涛の如き人氣を博して、断然流行歌界の王座を占めているのがこのレコードです。」⁽⁴²⁾

・「三原哀歌」 唄、松山時夫（パーロホンレコード）⁽⁴³⁾

・「三原は晴れて」 浜野耕一作詞、竹岡信幸作曲、春山一夫独唱
(キングレコード)

宣伝文には

「これぞファン渴望の流行歌宝玉篇、涙はらえば三原は晴れて

いとし朝風袂をなぶり胸には椿の花も咲く、詩の國、夢の國、
若人が憧れの三原山抒情歌篇です。におやかな詩情、甘美な佳
調！流行歌界を風靡した『椿咲く島』の姉妹篇ともいべき妙
なる竹岡メロディーを是非お聴き下さい。⁽⁴⁴⁾

・「島の朝霧」 唄いく松（オーゴンレコード）⁽⁴⁵⁾

・「三原山悲曲、二八の春」 小谷サユリ（オーゴンレコード）⁽⁴⁶⁾

・「ダンスミュージック 大島節」 喜代三（キングレコード）⁽⁴⁷⁾

・「燃える御神火」西條八十作詞、中山晋平作曲 藤山一郎唄（ビクタ）

一、赤き椿の夢のせて ゆきて返らぬ黒潮や

ほのぼの燃ゆる御神火に 島の乙女の唄悲し

戀し なつかし 三原山 山の煙よ いつまでも

二、月の砂漠を小夜更けて 驢馬にゆらる、旅ごころ

君住むかなたを眺むれば 空に淋しき渡り鳥、

戀し なつかし 三原山 山の煙よ いつまでも

三、波浮の港の朝霧に 別れ哀しき黒髪や

おもいで甘く月細き、夢の一夜の相模灘

戀し なつかし 三原山 山の煙よ いつまでも⁽⁴⁸⁾

なお二番の「月の砂漠を小夜更けて驢馬にゆらる、旅ごころ」
について説明しておこう。昭和六年七月三〇日、三原山の砂漠
と称される外輪山と内輪山のあいだの砂地に、蒙古産のらくだ
二頭と満州産のろば一頭が放たれ、翌八月一日から元村女子
青年団員が馬子となり旅客を乗せて砂漠を横断した。

この企画は人気を呼び、三原山の砂漠とらくだを結ぶイメージ
が多くの人に関心を呼んだものと思われる。料金は御神火茶屋
からの砂漠横断がらくだ一人一円、ろば一人五〇銭であった。⁽⁴⁹⁾
さらに当時の人気女優水谷八重子が、「御神火を背にして砂漠の
夕日を浴びながら、らくだに乗ってネッカチーフを振っている
ブロマイドが飛ぶように売れた」と言われている。

・「大島おけさ」西條八十作詞、中山晋平作曲、勝太郎唄（ビク
ター）「燃える御神火」と同様に映画「処女よ、さようなら」の
主題歌で、昭和八年八月一三日のラジオでも放送されている。⁽⁵⁰⁾

・「あの島戀し」、水野喜代子（タイヘイレコード）

・「波浮の夕焼け」、水野喜代子唄（タイヘイレコード）⁽⁶²⁾

・「島の御神火」、島田芳文作詞、近藤政二郎作曲、松平晃唄（コロムビア）

一、胸にたく火か 思いをこがす

戀はひとすじ 乙女のこころ

島の御神火 何故まねく

思いせつなや 夜の空

二、燃ゆる思いの あこがれこがれ

島の乙女の 黒髪戀し

とけてからまる 深なさけ

赤い椿の 花も待つ

三、波に一夜の 仮寝の枕

離れ島でも 一夜でとどく

三原お山に 立つ煙

とけて身をやく 戀の焰よ⁽⁶³⁾

・「御神火おけさ」（タイヘイレコード）⁽⁶⁴⁾

・「戀の大島」、よし町、二三吉唄（コロムビア）⁽⁶⁵⁾

・「ドラマ 御神火情話」 大井新太郎（タイヘイレコード）⁽⁶⁶⁾これは流行歌ではない。昭和に入り、浜口雄幸や松岡洋右の演説のレコードが出ている。

以上いくつか紹介した歌詞から判るのは、すでにわれわれが「天國に結ぶ戀」の映画や流行歌で見たように、自殺や心中あるいはこれに至る懊悩や苦悩とは切り離された、甘い、感傷的な側面が、大島や三原山と結びつけられているのである。特に伊豆大島が「若人の憧れ」とされている点に注目する必要がある。三原山の火口に身を投じたり、菊丸から海中に飛び込んだり、あるいは旅館で服毒自殺を遂げた多くのものが若者だったからである。

いずれにせよ、「天佑」（『東海汽船株式会社史』）とも言える大島ブームにより、東京灣汽船の東京―大島―下田の大島航路の乗客数は、金融恐慌、世界大恐慌の渦中にありながら、異様とも言える急テンポで増大する。⁽⁶⁶⁾

昭和六年 八万三〇〇〇人

昭和七年 一二万八〇〇〇人

昭和八年 一八万九〇〇〇人

昭和九年 二二万二〇〇〇人

2、詩の島から死の島へ——あるいは詩と死の共存

昭和八年二月一二日の松本喜代子の三原山火口への投身自殺から、伊豆大島は、詩の島から死の島に変貌していく。少なくとも死が詩と背中合わせになっていく。

伊豆大島の遊覧客の激増のテンポをはるかに凌ぐ速度で自殺志願者が蝟集し始める。

大島警察署の発表によると昭和八年一月一日から三月二四日までの三カ月足らずの期間に大島病患者は未遂も含め総計一〇七名に達している。その内訳は

「火口投身自殺男女合せて三二名、未遂六七名、大島通いの船中での心中一組、海への投身心中一組、三原山中での心中一組、その他二名の合計一〇七名⁶⁸⁾」

となっている。

この数字は、近年、東京の「自殺の名所」と言われた高島平団地での自殺者が一〇年で一〇〇人に達したのと比較すれば、実に驚くべき数と言わなければならない。⁶⁹⁾

さらにこの数は約一カ月後の四月二二日には一六四名に達する。⁶⁰⁾ そして一二月末には、前述のように九百数十名に達する。ところで昭和八年以前に伊豆大島で自殺者、とりわけ島外人の

自殺者が出なかったわけではない。大島警察署の発表によれば、昭和七年の大島での自殺志願者は未遂六〇名を含む一一五名である。⁶¹⁾

しかしながら奇妙なことにマスコミとりわけ全国紙は昭和八年以前の伊豆大島における自殺を取り上げることは皆無であった。たとえば、松本喜代子の投身自殺の第一報を流し、それ以降も『讀賣新聞』と並んで「三原病患者」のニュースを報じ続ける『東京朝日新聞』は昭和七年の伊豆大島での自殺を一件も取り上げていない。これはいったい何を意味しているのだろうか。

筆者の憶測によると当初『東京朝日新聞』も『讀賣新聞』も「第二の坂田山心中」を狙ったのではないだろうか。前年五月に起こった坂田山心中が多くの読者の記憶に生々しかったことであろう。流行歌、映画などが取り上げたこの事件が自殺、心中ブームの引金になったことは前述のとおりである。

『東京日日新聞』は、松本喜代子の投身自殺をはじめとする實踐高女事件を全く無視したが、自殺・心中の異常とも言えるブームが明白になると無視できなくなったのであろう、ようやく三月七日付紙面で初めて大島の投身自殺を報じた。

「また二人御神火に「元村発」六日午前大島に来た二十五歳位と二十歳位の二人連れの青年が他の見物客のすきを見て三原山

噴火口に飛び込み自殺をした。身元不明⁽⁶²⁾」

ここで『東京朝日』、『讀賣』、『東京日日』が二月から五月まで各紙面でも取り上げた大島の自殺関連の記事の数を算えてみよう。

二月	『東京朝日』	一六件
	『讀賣』	一〇件
	『東京日日』	〇件
三月	『東京朝日』	一六件
	『讀賣』	二八件
	『東京日日』	一〇件
四月	『東京朝日』	一四件
	『讀賣』	三七件
	『東京日日』	一五件
五月	『東京朝日』	二〇件
	『讀賣』	七五件
	『東京日日』	二六件

これらの数字を一見して判ることは、『讀賣』が関連記事を急増させていることである。他二紙が二〇件前後で推移しているのに対し、『讀賣』は、一〇、二八、三七、七五と一直線に増して

いる。このことの意味はなにか。『讀賣』が五月二〇日、「三原山火口底大探検」と銘打って実施した一、大事業に至るキャンペーンの過程である。

『島の新聞』（昭和八年三月六日）は、『讀賣』の社会部次長岩田得三の来島を報じている。

「三原山自殺防止研究会開催の目的で讀賣新聞社社会部次長岩田得三氏三月一日来島、噴火口その他島内を視察、各方面の名士を訪問し持まわり座談会を催した」

『讀賣』の狙いはどこにあったのか。社史を参照してみよう。⁽⁶³⁾

「青海原に浮かぶツバキの島、噴煙あがる御神火。三原山にあこがれて投身自殺する若者はあとを断たない。二月のある日、読売社会部員の会合で話題がこのこととなり、三原山の神秘のベールをはぎ、火口内部の現実の姿をさらせば、自殺防止に役立つのではないか、という意見が出た。次長の岩田得三が、火口に降りてみたらどうかと言いだし、部長宮崎光男が賛成して、二月末から岩田が実地調査を始めた。」

したがって、三月から『讀賣』が、三原山・伊豆大島関係の記

事を急増させているのは、このキャンペーンを念頭に置いたきわめて意図的なものと言えよう。

『讀賣』は五月に至るまでこの企画を伏せておく。五月九日、一面全面を使った社告により一大キャンペーンの幕が切って落とされる。

しかしながら、正確には五月一日(夕刊)でキャンペーンの準備はなされていた。第一面には大島の航空写真を含む写真四葉が「御神火の正體を發く、空から見た三原山」と題して掲載される。

四葉の写真のキャプションを紹介しよう。

(1)、死の噴煙が招く大島三原山内輪山噴火口の全貌

(2)、眞上より鳥瞰した噴火口内部と物凄い壁面

(3)、三原山内輪火口茶屋付近に自殺者供養のための奉安工事

中の中山忠道氏寄贈の地藏尊

(4)、早くも初夏の緑の中に波白き平和郷大島波浮港の空から

見た全景

ここには、当時、大島について抱かされたいくつかのイメージが簡潔に出ている。

(1)、(2)、は死のイメージである。付言すれば(2)はグロテスクのイメージでもある。「物凄い」という表現は、当時はありふれた日常的な事象を形容するのにも用いられた。

(3)、は死の彼方の浄土のイメージ。

(4)、は詩の島、アッコの島のイメージである。波浮の港が同名の流行歌を連想させたであろう。

「神祕の三原山噴火口底降下」と題する五月九日の社告にはいくつかのテーマが存在している。

まず、これは「自然界を征服する・・・決死的大探検である。」噴火口を千尺降下という世界記録を目指す「世界的一大事業には人體を焼く高い温度、「猛毒亜硫酸ガス」、「噴火とともに迸出する熔岩の危険と火口壁から崩れる落下岩の危険等々」が予想される。

まさに「決死的」なのである。この「決死」は比較により、さらに強調される。明治四〇年に理学博士中村清二氏は、三原山火口を降下した。しかし、この時の三原山は「微温三原山」であつて、「現在の鳴動と噴煙に生きる三原山ではない。」しかも、降下記録は四九五尺(一五〇メートル)に過ぎない。

また「例を外國にとれば地中海のストロンボリ火山の噴火口をきはめたフランス人の技師で探險家たるA・キルナー氏」の例がある。しかし、「このストロンボリ火山は三原噴火山よりもはるか静穩的であつて、しかもその降下深度は八百フィート(八百五尺弱)であつた。」

今回の決死的大探検は、過去の内外の同種の試みを凌駕する千尺降下という世界新記録を目指すものである。

しかし、この事業は単に世界新記録を目指すだけではない。それは科学的精神により準備され、科学の發展に寄与するものであ

る。

すなわち、すでに

「五月四日には、いよいよ噴火口内の學的諸試験に着手、本社宮崎社會部長の指揮のもとに岩田同次長、稲葉科學部主任、眞柄寫眞課長、橋本事業部員、それに『讀賣診療所長』醫學博士山田尚允氏も加はってまず噴火口内各深度の温度試験、續いてモルモット六匹、兎二匹、猿一匹による各深度の動物試験、さらに噴火口内の状態を知るための赤外寫眞撮影を行った」その結果は

「猿は腰を抜かし、兎は両眼角膜混濁して呼吸急迫を告げ、モルモットの一匹は遂に翌朝に至って變死した」

この亜硫酸ガスの危険ばかりでなく、

「高熱の熔岩、落下岩の危険は更に測り知るべからざるものがある。しかしわが社はあらゆる科學的方法をもってこれを防ぎつつ降下し……」

そして、

「この探檢が成功の暁には『火山國日本』に寄与するところ大なるものがあることはもちろん、実に世界の學會を驚倒せしめる貢獻であることを信ずる。」

科學が錦の御旗である。科學による科學の發展を目指す事業である。

しかしながら、この社告の冒頭にあるように

「……『御神火三原山』は、今や日々に續出する投身自殺者の心なき所業からついに暗うつにも忌むべき『死の三原山』と化すに至った。わが社は深くこれを遺憾とする道徳的意義に端を発して、ひそかに世界一大事業の敢行を企図……」

「赤外寫眞の科學的性能が効果を挙げ得る限りにおいての火口内、火口底撮影を敢行し得る完全なる自信をもつに至った結果、更に許すべくんば噴火口底に降り立って幾多の投身自殺者の亡骸の累積の死状を詳かにしたうえ懇ろに慰靈……」すること
に狙いを置いている。

社告は

「自殺防止に有力な端をなす喜びの日は近きにある。期して待て！」

と結んでいる。

五月九日の同じ紙面は社告の他に次の記事によって埋められている。

「計畫・調査・實驗——探檢決定までの日誌」

實驗・「火口學術試験の結果——猿は腰を抜かしモルモットは死す、火口内に充満する猛毒ガス、醫學博士、山田尚允」

「外国にも前例なく學術的貢獻は多大、東大名譽教授理學博士
中村清二氏談」

「既に温度試験で我國最初の成功、降下は世界一の深度探検、
東京帝大理學部助教授 地震研究所員 津屋弘達氏談」

動員されるのは学者の権威だけではない。時の文部大臣鳩山一
郎も次の談話を寄せている。

「妄想を打破矯正教育上に有意義、學會への寄与もまた多大、
文部大臣 鳩山一郎氏 談」

これらの記事、談話で注目すべき点を幾つか指摘しておこう。

まず第一は、中村博士も鳩山文相も読売の主張を受入れて

「火口底探検が成功してそこに横たはる自殺者の無残な姿が明
るみに出されれば、神祕にあこがれる三原山患者は今後跡を断
つであろう」(中村博士)

「火口底部に横たはる幾多の亡骸の惨状などを寫眞や記事に寫
しだして広く報道することができれば、『神祕の死』を信じて自
殺病にとりつかれている青年子女の妄想を打破矯正する結果を
生む」(鳩山文相)

第二に学問への貢獻の条件について中村博士は次のように指摘
している。

「……だがこうした研究はもちろん一回ではいけない。この
種の研究は年限を定めて継続的に行うことによって、すなわち火
口の変遷を歴史的に記録することによって更に一段の価値がある
のである。」

博士のこの提言が『讀賣新聞』にどのように受け入れられるか
については後に見るであろう。

五月九日以降、読売は精力的に三原山自殺を報道する。そして
単に事件の報道だけでなく、論者のコメントも掲載する。

五月一四日の「日曜文藝」は、第一線の評論家、新井格の「三
原山階級批判死の告知板」を掲載する。

新井は「三原山階級」を二つに分ける。まず第一に三原山に殺
到する観光客すなわち「モブ」である。第二は「三原山患者すな
わち自殺者そのもの」である。これらの人々については「わざわざ
遠隔の地から大島を死場所として赴き行く心理」を説明すべき
であり、「一言にして盡せば社会的モブ心理の罪だ。」

大衆社会、大衆心理を糾弾する新井は、「斎藤茂吉氏が自殺の誘
導的傳染性を指摘し、この防止策として自殺の報道禁止論をやっ
ているのは時宜的な卓見である」としたうえで、続けて、「『讀賣』
が、科學的探検に志向して神祕的迷妄を霧消しようと企圖してい
るのは自殺解消効果の高き策である」と評価している。

新井が『讀賣』の狙いを額面通り受け取っていたか否かは判らぬが、結果として『讀賣』の火口大探検がセンセーショナルリズム以外の何ものでもなかったことは後に見るとおりである。

新井が斎藤説を支持、実行するならば、探検をやっても報道しないこと、極言するならば、探検をやらぬことこそ必要だったのではないか。

五月末の火口底降下の決行を目指して『讀賣』のキャンペーンは続く。

五月一四日の同紙面の「科學」欄は一面を使って「世界噴火山巡り、その総数一千八十一山、東大助教授津屋弘達」のレポートを掲載している。

翌一五日々刊は、「三原山から生還して——『死』を嘲笑う人々——彼等は讚える——光明の新生を」と題して「三原山自殺行きから生還した五人」の告白を載せている。この特集記事の狙いは、「死を願う人々に『生きる光明』を与える一助」とすることである。

一七日には中村博士一行が大島に向け霊岸島を橋丸で出帆。

二〇日には、「歴史的な本社の三原山火口底の下準備のため宮崎社会部長、小山記者、藤本寫眞課長、工事担任者鈴木信二郎氏及び鷺、大工、電話工夫等の一行二〇名は午後九時霊岸島発の菊丸で大島に先發した。」

二一日付の『讀賣新聞』は、ほぼ一頁を使って火口底探検の準備

について詳細に述べている。記事には一五〇〇尺の火口底に降りることがいかに危険かを強調するとともにこの危険を克服するために「現代科學の粹をあつめて九十九パーセントの科學的安全率をもって」準備が完了した点を強調している。

準備はゴンドラ、それを吊り降ろすクレーン、ロープから始まり、ウインチ操作の動力源であるガソリン機関、防毒マスク、酸素ボンベ、消防夫の刺子、落石から頭を擁護する竹兜、ゴンドラと地上の通話をはかる軍用電話、探検七つ道具(最高最低寒暖計、通常の寒暖計、湿度計、ピッケル、磁石、高度計)にいたるまで実に詳細に列挙されている。

二一日、元村に到着した先發隊一行は同道の電工人夫二〇余名とともに早速、設営に取りかかる。設営工事は多大の困難を極めたが二五日午後完了した。この工事に見られる興味深い点を二三挙げておこう。

第一に工事は島民の全面的な協力の下に行われた。

「先發隊一行は電工、人夫ら二〇余名を率いて二一日朝六時朝もやかすむ大島に到着、元村三原館を探検隊本部に元村、岡田、野増、差木地四ヶ村の人夫二〇〇名を動員して直ちに探検決行の第一段階的活動を開始した。⁶⁴⁾」

人夫は「クレーン、発動機その他探検用具の運搬にとりかかったが、何しろ素晴らしい重量を有する各器具の上に登山道の嶮岨、濃霧等の悪条件に阻まれているので作業困難を續けている……」

火口現場までの運搬を完了するにはなお数日を要する見込みなので交代として差木地村の人夫百余名が待機⁶⁶⁾していた。

島の人夫は四〇〇名が工事に加わった。

「全島民の熱烈な支持と島選りぬきの精鋭人夫四百名の血と汗の結晶、探検隊一行の不眠不休の努力は遂に報いられてさしもの三原山噴火口底探検の大難工事クレーン、発電機の据付けは二五日午後全く完成した⁶⁶⁾」

島民の協力は工事人夫にとどまらなかった。読売新聞のセンセーショナルなキャンペーンは観光客ばかりか島民をも興奮の渦に巻き込んでいく。二六日には二〇〇〇人を超える群衆が大クレーンの腕木引上げ大作業に見入っている。この群衆の整理と警戒のために元村、野増両村の青年団五〇名が上野署長率いる警官と協力して厳重な警戒陣を布いた。

さらに、この一大イベントを儀式化するために島民は積極的に参加、動員される。

二六日の「最後試験にも市廳長、各村役場、青年団、在郷軍人会、小學校も授業を休んで早朝から教師に引率されて登山、最後の試験がもし条件がよければ降下探検されるであろう壯舉を見んものとしめき立っている⁶⁷⁾」

また二三日から来島した岩田記者はこの日乗馬で山頂に到着すると「村長松木國次郎氏に引率されてこの壯途を祝福すべく登山した波浮港村女子青年団員二〇余名は、ソウメン絞りのアンコが

代表となって同記者に眞心を込めた花束を捧げて成功のはなむけをする⁶⁸⁾」

島民の協力は、近代科学の粋を集めたこの學術探検の成功祈願にまで及んだ。

「悪天候に悩まされているわれら探検隊一行の難波ぶりに小さい心を痛めた地元三村の尋常高等小學校全生徒四〇〇餘人は二八日午前一時、日曜にも拘らず校庭に参集、校長菅野尊賢氏に引率されて同村村社三原神社に到りわれらの探検者岩田、眞柄兩氏の一日も早く火口底を極められんことを祈願した⁶⁹⁾」

ところで島民の全面的な協力は次のようなそれ以前の御神火崇拜の事実を考えると一種の文化変容が起こったのではないかとの疑いを抱かせる。

御神火に飛び込むことは以前の島民にも、昭和八年に比べ極く少なかった来島者にもおよそ考えられぬことであつたらう。御神火は聖なる存在であり、飛び込むことはこれをけがすことに他ならないからである。

既遂未遂を問わず三原病患者の第一号は明治四二年に出現したように思われる。

「死の登山に同伴した目げき者の座談会」で山田氏は次のように語っている⁷⁰⁾。

「随分古い話だが明治四二年初秋、島にはまだ遊覧客など薬にたくもなかった、唯保養という客がほんの數人數えるほどの頃

だ、千代屋旅館に滞在していた神奈川縣小田原町生まれで東京の本所緑町三丁目印刷屋さんで川村ともいった人の妻君が当時二六だった。その人が死を求めてこの純情平和そのもの大島へ來島そして御神火の煙にミワクされ幾度か登山投身しようとしたが島民の神と仰ぐ崇高なる心持ちと物凄い噴煙に遂に死を求められずトボトボ下山とうとう山紫陽花のさびしく咲いている長根の浜から潮の花と散って淡雲りの朝早く岩隠に打ち上げられていた。・・・私の記憶ではこの人が御神火に死を求めた最初の人と思う」

第二号は大正一四年七月一三日に服毒自殺した青年である。『島の新聞』大正一四年七月一六日は次のように報じている。

「青年ネコイラズで自さつ

七月一三日午前九時東京府荏原郡大崎町下大崎二七六田端広吉方雇人安田勝晴（二五）は元村海氣館に於ネコイラズを服用自殺した。遺書に依れば本人は去る七日自殺の目的で淺間山に登りたれ共のうむのため投身する出來ず日光に廻りたれ共警戒嚴にして果たさず遂に一二日本島に來たり三原の噴火口を思立しが降雨の爲是亦目的を果たすことを得ず一三日に到りネコイラズを服用せる模様である。服装は相当な着物なれ共労働せる模様であり石炭商のブローカーらしく推せられる。⁽⁷¹⁾」

噴火口に実際に飛び込み自殺を遂げた最初のケースは昭和三年一月一三日に投身した和田龍造のケースと思われる。⁽⁷²⁾ 当時の『島の新聞』昭和三年一月一六日は次のように報じている。

元村二五白井ふじ方へ静養に來ていた千葉県の人和田龍造君（二七）は一三日昼ごろ四通の遺書を置いて三十銭の餅菓子をもち三原へ登山。櫻のステッキを削って『不歸の旅立標』と記し本籍氏名年月日を書き火口付近に建てそこに外とうと餅菓子の残りを置いて『生は難く死は易し・・・一決死を選ぶ云々』と砂上にかき残し、よう岩もゆる数千丈のお穴へ飛び込んで影も形もなくなった。⁽⁷³⁾」

問題はこの噴火口投身自殺が島民にいかなる影響を与えたかである。

「島民はみんな全く驚いて三原神社に一同揃って拝禮して早々下山したが、これを聞いた老人達も皆手を合せて神様に御詫びしたものです。記者——ともかく、御神火と尊び不浄の人などは登山もしないほどのなかに飛び込んでしまったんだから順朴な島の人達はさぞ驚いたことでしょう」⁽⁷⁴⁾」

「当時島民は御神火を汚したというので神官をよんでお祓い式

をやったもの⁽⁷⁴⁾」

「島では神官を招いて浄め、三週間は島民の登山を禁止した。ことに女人の穢れのあるものは、登山しないことの申し合せさえできたのである。・・・ずっと以前には、登山するものは一週間も行をして登った。また山上では話をするこことさえ禁じられていた⁽⁷⁵⁾」

明治四〇年ごろ、早稲田中学三年生の西条八十は初めて大島に行った。彼は昭和一〇年、当時を振り返って次のように述べている。

「三原山には御神火を案内するお婆さんがいて『聲を立てちゃいけない。聲を立てると神様がお怒りになるから、・・・』といはれて、氣味が悪くなりながら、火口をのぞいたもの⁽⁷⁶⁾だ。」

この様に神聖な御神火にいか「科學の發展」「自殺防止」を旗印にしても、人間が入り込んで探検することなど許されるものであろうか。わずか五年前には最初の投身自殺者が出たため神官がお祓いを行い神様にお詫びしているのである。

しかし一般的に言えることは、この五年間は伊豆大島にとって真に激動の年であったことは前述のとおりである。激増する観光

客、また観光業が生業として急増したことが、島の世俗化と文化変容を促進したことは容易に推測できる。

これを象徴する事件として昭和六年一月二〇日、初めて島民が噴火口投身を行う。『島の新聞』昭和六年一月六日は次のように報じている。

「先月二〇日元村一二番地塚根シン同娘佐々木よね（二三）の母子相携えて三原噴火口へ投身。原因不明であるが兼ねてより決心したものかそれぞれの向へ最後の手紙を遺し家中を整頓し寺墓等へも参詣して後決行したものである。」

前述の昭和三年一月一六日の噴火口投身自殺第一号からこの島民による最初の投身が起ころるまで実際、何件の噴火口投身があったのかは明らかではないが、『島の新聞』で出ている投身関係の記事を紹介しておこう。

「御神火茶屋の主人霧の中を全くの夢中でその人の跡を追って火口原をひた走り内輪を登り探りつつ火口に降りたら人かげが見えたので『一寸まって』と呼ばば『御足勞でした』の一言を残して両手を高くそろえて水中飛込の姿勢も正しく熔岩もゆる洞穴の底深く飛込だ。その人とは銀座資生堂の若い店員。新調の洋服を先以て店へ郵送、宿の主人の止むるのをきかずジャケット一枚で三

原へ登山覚悟の自殺」(昭和三年一月六日号)

「三原へ飛び込みの為の来島者増し御神火茶屋の大將神の道を説いて助くるもの十数名。警察からおほめの言葉を頂く」(昭和三年十二月六日号)

「又御神火へ飛び込み一人、これで合せてダイビング三人。前に結核島として東京新聞に叩かれ、いま又自殺島として世に聞こえんとす、まことに生きに来る人死にに来る人数多集まる島なり」(昭和四年九月六日号)

以上二つの記事から言えることは昭和三年から四年にかけて自殺志願者の来島が急増したことが推測される。これは繰り返して述べたように観光客激増とパラレルに進行していると考えて差支えあるまい。

「一二日柳川館に投宿せる男女山上の積雪をおかして登山、女は男のすきをうかがい火口に投身自殺。同女の身許は判明せぬも銀座のカフェー、ナナの女給なりし由」(昭和五年二月一六日号)

「戀文を残して本一六日一組の若い男女生前の戀文一束を火口壁に残し目かくしをして兩人手に手を取りお穴深く飛込んだのを

登山者發見大島署へ届出たが身元不明」(昭和六年九月一六日号)

そして前述の一〇月二〇日の島民による最初の投身自殺と続くのである。かつては穢してはならない神聖な御神火への投身自殺は習俗の弛緩、変質を象徴するものであった。

さて島民が『讀賣新聞』の火口底大探検に参加するのを促進した要因として観光立地化、習俗の変化が考えられるわけだが動員の方も考慮すべきであろう。ここでは警察の全面的な協力を指摘しておこう。

その協力は探検をスムーズに進行させることを第一義とした。既述のように青年団や在郷軍人会の協力を得て群衆を整理看視するばかりでない。読売新聞社が通信省の特別許可を得て火口から元村まで電話線を架設する。二日に架設工事が完了した電話線沿いには大島警察署名で次のような立て看板が建てられた。

「注意

今回讀賣新聞社が三原山噴火口底降下探検連絡用トシテ火口元村間登山道路ニ沿イテ特設シタル臨時電話線ニ手ヲ触レルコトハ絶對ニ之ヲ禁ズ

五月二一日

大島警察署」⁽⁷⁾

ところでこの電話線はもっぱら報道のスピードアップのためのものであった。当時各新聞社間の「新聞戦争」は激烈を極めていた。『讀賣新聞』自身、電話線の開設の意義を次のように述べている。

「火口から元村へ電話線特設 一里十町余 火口探検に伴う設備は以上にとどまらない、本社は探検時の光景を一刻も早く速報するため今回特に逋信省の許可を得て、火口と元村郵便局前間一里一〇町余の山路に仮設軍用電話一回線を敷設、これによって海底線との連絡を早かしめる一方、火口探検の歴史的光景を寫眞に速報すべく本社機を出動三原山外輪山の火口原において通信筒吊り上げの離れ業を演ぜしむことになっている」⁽⁷⁹⁾

さて火口底探検という一大イベントの準備過程は、著名な学者、科学者などの参加によっていっそう大きな意義を獲得している。

「・・・すでに起重機の据付、吊り下げ用ゴンドラの運搬、電話線敷設工事等すべて完了したので後續探検隊の一行は二五日午後十時靈岸島發菊丸で出帆大島の壯途にのぼった。一行は學者側東大理學部化學教室理學士望月喜三雄、同岩崎岩次、東大助教授地震研究所理學士津屋弘達、慶大教授醫學博士川上漸、助教授醫學博士有馬宗雄、同助教授醫學士加藤俊男、日本酸素會社員関屋

祐四郎、ほか數氏。本社側からは火口底撮影に降下する眞柄寫眞課長、庄田事業部長、稲葉科學課主任、診療所長山田尚允博士及び飛行機『ヨミウリ』號による通信筒吊り下げの爲め飯島飛行機関士を加えて十五名で一行は發刺たる元氣を横溢させて菊丸に乗船」⁽⁷⁹⁾

なお既述の如く、「三原山學者」とまでいわれる東大名譽教授理學博士中村清二と甥の文士中村正常はすでに一八日に大島に到着している。

これらの學者たちはこの探検にとっては、大半が高価な裝飾品の役割を果たすことになる。準備にあたってのアドヴァイスはそれなりに有効であったとしても、この探検自体が、打ち上げ花火的なイベントであり、長期の継続的な觀察、調査、研究とはとても言えなかつたからである。さて次に探検成功（五月二九日）を報じる『讀賣新聞』五月三〇日夕刊に至る約一週間の紙面をみてみよう。

火口探検関係では既にみたように準備に関する記事が圧倒的に多い中で火口底に横たわっていると想像される遺体についての記事が目を惹く。五月三〇日の「學會餘話」というコラムを見てみよう。

「人間燠製工場 三原山噴火口

本社三原山火口底探検に参加し、近く渡島する慶大病理學の川上漸博士の昼寝は有名なもので・・・(中略)

ところで今回の三原山探検だが博士曰く『火口底の気温は相当高温と思われるが摂氏百度くらいだとすると投身自殺者は完全にミイラになっていると思うね。つまり黴菌の發生を許さないから腐敗することもなく地熱で徐徐に乾燥し燻製になっている筈だよ・・・』

二日後の五月二五日付紙面では、元村の探検隊本部で川上博士を初めとする、有馬、加藤両教授、山田博士を含む一〇名の座談会が載っている。そのタイトルは

「火口底の自殺者はどうなっているか？ 興味ある我社探検隊本部の座談会」とあり、サブタイトルは

「引懸った場所により
漂白されたミイラに」

となっている。座談会の内容は「投身自殺者が火口底でどういう状態にあるのかについて医学的立場から」推測したものである。しかし、見出しの付け方は明らかに「グロ趣味」を喚起するものである。

さて五月二六日の無人ゴンドラ降下試験を経て火口底探検は二九日午後本番を迎え「成功裡」に了った。五月三〇日付の『讀賣新聞』は次のように報じている。

「世界的大探検成功、三原山火口底を究む。

岩田記者の驚異的記録！

千二百五十尺降下

世界記録八百尺を遙に突破

人類史上空前の偉業

わが社の世界的大壯舉！三原山火口底の大探検は一行の渡島後去る二一日の新爆發によって火口内七百五十尺の箇所新岩漿隆起したため降下準備に改善を加うるの余儀なきにいたり、且つ連日暴風、または暴風雨に見舞われて探検決行を阻まれていたが、よ（いよ）昨二九日諸般の設備完了、天候また快晴にして風速わずか八七メートル、最良のコンディションに恵まれて降下大探検は遂に決行された。即ち午後二時三〇分、三原山頂一帯息づまるような興奮と緊張の内にゴンドラの人となった決死の探検者社會部次長岩田得三君は感激の嵐のなかを二時四十一分降下を開始し、三時六分火口一千二百五十尺の深部に降下成功、そこに小店員風の死體一個を發見、更に七華八裂怪奇極まる地軸の爆發狀況をつぶさに觀察し直ちに上昇を開始し、三時一四分無事地上の人となった。斯くて遂にわが社の三原山火口底探検の一大壯舉は計画以來、四ヶ月にわたる苦心の科學的設備と探検者の決死的努力によって大自然の猛威も見事征服された、記憶せよ！一九三三年五月二九日午後三時一四分！前人未到、御神火の名によって深く千古の謎を秘めた三原山火口底は降下されること實に一千二百五十

尺、ここに輝ける世界新記録は歴史的に樹立されたのだ、この降下記録は仏人キルナーの保持したイタリアのストロンボリー火山口底降下八百尺の世界記録を凌ぐこと遂に四百五十尺、火山国日本人の手によって作られた誇るべき世界新記録なのである。」

と述べ引き続き、次の見出しが踊っている。

『お土産が見つかったぞ！』

火山口底に小店員風の死體発見の電話

比感激！壯舉完成の刹那

この成功の第一報のアウトラインと、同じ紙面の詳しい記事を合せてみるといくつかの客観的な事実が判る。

一、岩田記者の降下、上昇の記録

二時四一分降下開始 — 同四九分停止

同五一分降下再開 — 同五五分二度目の停止、同五六分三

度目の降下 — 三時三分 三度目の停止、一二五〇尺の

地点、同六分上昇開始、同一四分地上に到達。

二、一二五〇尺の地点で小店員風の死體を発見（後日の「手記」によるとさらに死體を発見している）

三、一二五〇尺の火山口降下は世界新記録である。

岩田記者に引き続き四時一二分、眞柄写真課長が降下を開始したが同二五分、七〇〇尺の地点で爆発、噴煙に妨げられ降下を断

念し上昇を開始同三五分地上に到達した。

散文的に言うならば両名合せて五六分間の探検を読売新聞社は紙面、講演会、催事、映画等々一カ月以上にわたって徹底的に利用し尽くす。この「大探検」の成果に便乗する企業も白木屋、映画社、レヴューと多方面にわたり、果てはNHKまで登場する。以下、異常とも言える熱狂ぶりを見てみよう。

成功を報ずるウナ電は三原山から特設電話によって元村へ、元村から海底電話線で下田へそして東京中央電信局から本社に「閃光の如き科学のリレー」により三時四五分に到着した。この「世界的壯舉を一刻でも早く市民に知らせるために

「銀座から京橋、日本橋、丸の内方面の到るところに速報のビラが貼られると、折柄ラッシュアワーの街上はたちまち一杯の人だかりとなって、むさぼるごとく一氣呵成、息もつかず讀みくだす、銀座の松屋付近など人、人、人が重なりあってプロムナードは人止め騒ぎだ、そこへ今度は號外だ、・・・號外売りも・・・街へ飛び出すや否や市民の重圍に陥って號外は飛ぶように売れる」さらにこのニュースはAK(JOK)に、送られ、ハースト、OP、AP、等の外電網を通じて「全世界を怒濤のように震撼し去った。」⁽⁸¹⁾

一方、大島では

「午後六時各戸に讀賣旗が掲げられた沿道を宮崎社會部長を先驅に岩田、眞柄の両勇士を中心とした榮譽の一行は意氣揚々と探検隊本部に凱旋した。……一行は直ちに梅本支廳長主催、上野大島署長、六ヶ村々長及び島内名士約五十名出席の大祝宴に臨んだ」⁽⁸²⁾

翌三一日、午前一〇時、一行は梅本市廳長、上野大島署長、石井元村村長など島の名譽職、汽船關係者、島民に見送られつつ特別仕立ての東京灣汽船菊丸で元村港を出発した。菊丸は満船飾で船腹に「讀賣新聞社火口底降下大探検隊凱旋」と白地に大書してメインマスト高く日章旗と本社旗を掲揚していた。

同日「四時、本社正力社長はじめ各新聞通信社、少年東郷會、府立第三商業學校吉沢校長以下生徒百名、松竹撮影所女優、新歌舞伎座出演俳優、三越、松坂屋、高島屋、松屋、白木屋各百貨店、新富町紅裙連、本社員一同その他一万六千余に上る大歓迎群が固唾をのんで一行の帰着を待ち侘びていた」⁽⁸³⁾

「かくて沸きかえる萬歳の歓呼の嵐の裡に花環花束を送られた両君はじめ探検隊一行はこの素晴らしい凱旋行進譜の中をくぐりぬけて自動車上の人となり数十台の自動車をつらねて凱旋大行進を開始した。京橋交差点から銀座街頭へ現われて舗道に居並ぶ群衆大歓呼の聲に答えつつ芝口から二重橋前にいたり一同うち揃って宮城を遙拝、ふたたび車を驅つて明治神宮へ參詣し、壯舉成功の報告を終わって同五時三十分一路社員歓呼の本社へ入った」⁽⁸⁴⁾

同夜八時からは正力社長をはじめとする社員二百余名出席の歓

迎祝賀会が丸の内会館で開かれた。

それ以後『讀賣新聞』は約一カ月、探検隊メンバーの手記の連載を開始する。以下にそれを列挙しよう。

・岩田得三「死闘から生還へ」(六月二日から一三回、六月一日完結)

・眞柄秋徳「撮影に噴煙と闘う」(六月一五日から三回、六月一日完結)

・「探検隊に参加して」(六月一九日から一〇回、六月三〇日夕刊完結) 東大助教津屋弘達三回、慶大教授川上漸四回、慶大医学士加藤俊男一回、東大名譽教授中村清二二回。

これらの手記のメインは岩田記者のものである。一三回の手記の見出しを列挙してみよう。

- ①腕木は廻った!身、忽ち噴煙中へ
- ②鬼氣迫る靜寂!!遙か下にアツ地獄
- ③妖火滅し大爆音 一瞬・刎上げられる
- ④猛煙快く霽れて お、見た!死體
- ⑤遂に前人未踏の火口底に身をおく 死體を僅か廿尺先に
- ⑥死體があるく しかも半裸の女
- ⑦無情!扉開かず 刹那、アツ大爆發
- ⑧あ、俺は死ぬ!夢中で危険信號
- ⑨お、地上の歡聲 天祐!!遂に還る
- ⑩「千二百五十尺降下」現に聴く快報よ

⑪「右は危ないぞ！」喘ぐ、訣別の言葉

⑫學説を裏づける見た火口の現象

⑬憧れの「神祕の死」現實には余りに悲惨

これらの見出し及び手記そのものの内容からいくつかのモチーフを見ることができ。

A、決死の探検

B、冒険譚——誰も行ったことがない噴火口底に降下し異様な光景を伝える。

C、グロテスク——死体

D、エログロ——「死體があるあるしかも半裸の女」

E、科学信仰——「學説を裏づける、見た火口の現象」

F、戒め——⑬、これらは他の手記にも頻繁に現われてくる。

死体の現状からして、三原山火口に飛び込んでも途中でいくつもせり出している岩板に墜落し、そこからさらに落下したり、場合によっては岩板上で餓死することもある。松本貴代子が夢想したように一挙に岩漿の中に飛び込むことは不可能であるから「一條の煙」となることはありえない。「神祕の死」など夢みるなどということである。そして人生の闘いにくじけるなどという戒め。他の手記（加藤俊男、中村清二）も、この戒めで締めくくっている。

さて、これらのモチーフのうちA～Dは明らかにマスカルチャ

の構成要素と言える。Eは既に指摘したように「科學の權威」を援用し、この探検が「科學に寄与」することを強調する。もともと当時（そして現在）の日本人の大半がそうであるように彼らは決して科学のファンダメンタリストではない。たとえば成功祈願のための神社参拝。

Fは、この探検の正当性をEと共に担っていることはいうまでもない。そして当然のことながらこれらモチーフを根底で支えているのは営利主義である。いみじくも岩田記者の次の言葉に現われている。

「勝った！勝った！天祐、神の加護。熱心に支援して下さった、多数の方その熱意と真心の集積！中村先生は！川上先生は！そして『讀賣新聞の社運をかけて』と、出發前に、僕を激励して下さいたあの正力社長は」（傍点、筆者）⁽⁸⁵⁾

六月の『讀賣新聞』の紙面は探検隊の凱旋、連載物の他にも伊豆大島、三原山関係の記事を連載している。これらの記事が連載物との相乗効果をもたらしているのは明らかである。これを列挙してみよう。

・ 火口底の死體、少年の父親本社へ 岩田記者と會見、冥福を祈る（六月一日）

・ 大島署一パイ喰う 死體と御經の代を残して永住する筈の心

- ・ 中一家ドロン（六月二日）
- ・ 獨り者は辛い！刑餘の身に將來を悲觀し断食して火口へ（未遂、筆者、六月五日）
- ・ 自殺の大島から明朗の大島へ 本社探検隊寄贈の電話線、聖火の護りに貢献（六月六日夕刊）
- ・ 洋服青年飛込む（〃）
- ・ 將校婦人 御神火 危ふく取押ふ（六月八日）
- ・ 櫻丸から身投げ 船員に救はる（六月八日）
- ・ 新夫婦火口へ（未遂、六月一日）
- ・ 遺留品から判った 家出青年の自殺、三原山展で奇縁、兄が発見（六月一日）
- ・ 火口自殺の青年危うく救はる、本社寄贈電話奏効（六月一日）
- ・ 火口底探検の世界的反響 火山国イタリーの學界に大衝撃 ミラノ大學教授カ博士本社へ資料提供を求む（六月一日）
- ・ 死神も逃げる男 五度目の三原山も無情、怪！妻は次々に自殺（〃）
- ・ 火口壁上の放れ業 自殺男を見事引揚ぐ（〃）
- ・ 戒める母の愛に蕩児死を止まる（〃）
- ・ 青年飛込む（六月一日夕刊）
- ・ 火口壁にかかった自殺死體を発見 本社探検隊のクレイン利用 大島署が冒険引揚げ（〃）

- ・ 死に案内される二月前 大島に遺した「淋しい心」 歌の茶屋に三枝子さんの一文（六月一日夕）
- ・ 御神火、また青年を呑む（六月二日）
- ・ 本紙が取持って三原山火口上に 父子六年目の對面、死體引揚げの勇者、渡邊昇一郎君の喜び（六月二四日）

これらの記事から推測されるのは三原病患者は減っていないということである。

読売新聞社は「五六分間」をさらに利用し尽くす。

早くも六月一日から「三原山探検展」が多摩川園で開催される。

『読売新聞』六月三日号の広告を見てみよう。

「讀賣新聞讀者優待 自六月一日 至六月二〇日

三原山探検展會場 東横目蒲電車

多摩川園

大島全島及三原山山頂の實景

内容 噴火口探検寫眞及参考品

大島名産即賣島のアンコのサービス

大島と内地との交通狀況

餘興 大島情緒演藝と活動寫眞」

とあり、同じく六月三日夕刊には

「探検展あすの餘興

本社主催で多摩川園で開催中の『三原山探検展』は物凄い人氣を呼んでゐるが、三四の土日曜兩日の餘興は、大島情緒「小唄レビュー」六景、大和家連成駒家連の曲藝漫藝の他島のアンコも特別出演する」

との記事が見える。

さらに六月一日の紙面によると連日数千人の觀衆が殺到しているという。

「アンコもサービス

大人氣の『三原山探検展』

東横電車沿線多摩川園で目下開催中の本社主催東京灣汽船會社後援の『三原山探検展覧會』は大島龍の口で採集した化石、卅坪の大島全島大模型をはじめ火口底探検の世界的大冒險全寫眞が陳列され、大島名産即賣會では島のアンコのサービスもあるといふので連日数千人の觀衆が殺到引きも切らず廿日の期限もために延期される模様である。(六月二五日まで延期された)」

そして『讀賣新聞』六月五日夕刊には次の一面大の広告が載る。

『火口探検、三原山展覧會

六月九日(予定)より 會場 白木屋 四階

1、三原山火口探検隊使用の七ツ道具其他一切

2、三原山探検の電氣應用大パノラマ

3、火口探検決死的撮影寫眞百餘種

4、大島に関する歴史的文献寫眞風俗其他

5、島のアンコの椿油製造實演等

主催 讀賣新聞社 後援 東京灣汽船株式會社』

この展覧會は、実際には一日から開催された。初日の模様を『讀賣新聞』六月一二日夕刊は次のように伝えている。

「開場と同時に忽ち殺到、けふから日本橋白木屋で、本社主催三原山探検展

本社主催 東京灣汽船後援の三原山探検展覧會が十一日から日本橋白木屋で開催した。『三原山時代』の現出から世界の視聽を蒐めた劃期的大探検の成果を飾る展覧會だけに白木屋の開場は朝來大混雑で蓋あけと共に雪崩れを打って押しかける觀客でたちまち四階の會場は身動きも出来ない有様である。

岩田、眞柄両探検者の生命を保護した記念のゴンドラは岩盤のための岩ずれの跡が残って探検隊の苦闘を偲ばしむるものがあり、特に大島署から出品した自殺者の遺留品などは恐怖と好奇の

焦點となっている。

さきに天覧の榮を賜った中村清二博士の火口圖解や三原山火山の模型、熔岩、探検隊決死的撮影の寫眞なども陳列されている。會場の一隅では大島名産椿油をそうめんしぼりの島のアンコ達がサービス振りよろしく即賣している。開期は來る廿日迄である。」

六月十日には銀座クロネコで『三原山の夕』が開催された。（『讀賣新聞』六月十一日）

「『三原山の夕』ゆうべ七時から銀座クロネコで『三原山の夕』が催され探検に特派された稻葉、小山の兩記者をはじめ約卅名出席、探検談に花を咲かせて初夏の夜更けるまで成功に祝盃を舉げた」

六月一五日には岩田徳三、眞柄秋徳兩名の講演を含む「探検報告講演会」が日比谷新音楽堂で開催された。『讀賣新聞』六月一四日には次の広告が掲載された。

「三原山噴火口底降下

探検報告講演會

あす 日比谷新音楽堂にて

有史以來空前の世界的一大壯舉として滿天下の血を沸した本社の三原山噴火口底千二百五十尺降下探検——その鬼氣迫る探検

記はすでに第一の降下者岩田得三君によって讀者の眼前に展開され終り、明日の紙上からは第二の降下者眞柄秋徳君の探検體驗記

を掲載することとなったが、全讀者の驚異と讚嘆の聲は岩田君の手記によって更めて嵐のごとく募る一方、この決死冒険の實情と收穫を探検者の口から直接聴かんとする要望とみに多きを加えられるに鑑みた本社は、その熱烈なる各方面の要望に副ふべく、左記の次第によって『三原山噴火口底探検報告講演會』を開催することを決定した。當日は、岩田、眞柄の兩探検者が紙上に盡し得ざるところを口に託して詳述するのみならず、いわゆる『死闘から生還へ』の死線を越ゆる實感を魂こめて講演するのであるから、探検記とはまた別趣な興味と感動を興え得るのである。しかも添うるに探検實況映畫をもつてするのであるから、聴者はあたかも探検を實見するかの快心境に置かれるであろう。Ⅱ（會場整理費として一人金十錢）Ⅱ

日時 六月十五日午後六時よりⅡ（但し雨天の場合は順延）

場所 日比谷新音楽堂

講	演
探検の經過報告 探検隊長 社會部長 宮崎光男	徳三
三原山噴火口底を征服して 探検者 社會部次長 岩田	
火口内撮影に噴煙と闘う 探検者、寫眞課長、眞柄秋徳	

映	三原山噴火口底探検の實況（トーカー版） 一卷 日佛拳闘大試合實況（トーカー版） 一卷
畫	發聲漫畫 數卷 主催 讀賣新聞社

この講演会については『讀賣新聞』六月一六日に「雨空にめげず殺到、聴衆息を殺して傾聴、本社の火口底降下探検報告講演會」の記事を掲載しているが、内容については省略する。但し、この講演会で「日佛拳闘大試合實況」の映画が上映されている点に注意すべきである。「日佛拳闘大試合」は三原山火口底大探検の次の目玉として準備され実行された。⁽⁸⁶⁾

『讀賣新聞』の大探検ブームの演出は展覧会、講演会にとどまらない。六月三日、東京AKは午後六時二五分から五五分まで次の放送をしている。

「講演

- 1、「三原山噴火口底の神祕を發く」 岩田得三
- 2、「火口底の寫眞撮影」 眞柄秋徳

『讀賣新聞』はこの講演の内容を当日のラジオ版で詳しく載せている。この放送をどのくらいの人が聞いたかは今となっては知るよしもないが前年の昭和七年にラジオ受信契約世帯数が一〇〇

万を突破していること、当時としてはゴールデンタイムに近い時間帯に放送されていることを考えるとかなりの数の人々が聞いたものと思われる。

ラジオ放送は『讀賣新聞』に思わぬ余徳をもたらしたと言える。すなわち他紙は『讀賣』の三原山火口底探検を一切無視していたが、他紙もラジオ版は掲載している。⁽⁸⁷⁾

さて『讀賣新聞』六月六日（夕刊）に次のような広告が出ている。

「◎パターベビー新刊映畫 本日發賣

空前の大快舉 三原山を曝く 倍大一巻 金十二圓。

◎三原山風景 日大一巻五圓五十錢」

パター・ベビーとはフランスの映画撮影機製造会社パターがアマチュアのホーム・ムービー用に発表した、九・五ミリの撮影機である。⁽⁸⁸⁾

「三原山ブーム」に便乗したのは『讀賣』だけではなかった。『讀賣』演出の「大探検」そのものに便乗するものが続出した。日活では『三原山は笑っている』と題する実写記録を製作した。

「同社営業部三宅巖を班長として一行約十五名が大島にロケーションした、これはシナリオを如月敏、小島正雄氏が共同執筆

し實寫の中に御神火を讃えたユーモア物語を搗き交ぜることとなったが、同映畫には我社の探検壯舉を取り入れ科學の力で自然を征服せんとする意図を強調して無意味の死に慕う者たちへの警告とする」(『讀賣新聞』昭和八年五月二十七日夕刊)

この映画は六月一日封切られた。また同じ日に「讀賣新聞決死的冒險撮影、實寫 映音商會作製 三原山を探る」が五軒の映画館で封切られている。

フォックス・ムービー・トーン・ニュース東洋班もこの探検をトーカーに撮影した。さらに松竹も噴火口映画を作製し六月三日に封切った。

三原山探検はレビューにも登場する。『讀賣』六月五日にはムーラン・ルージユの次の広告が載る。

「六月五日替り

プログラム

一、三原山探検記 八景

二、二つの人生 七景

バラエティ

三、初夏と蛇 一四曲

四、むつつり仁義 六景

何れも時期のもの、時事のもの、獨りむつつり仁義は、遠き過

去を現代から見る、蓋し初夏名畫

レヴュー、ムーラン・ルージユ

新宿武蔵野館通 新宿座

さて六月の紙面を「探検シリーズ」等で埋め尽くした『讀賣新聞』は七月以降、二度と「火口底探検」を行わない。「科學的解明」も「科學への寄与」も二度と口にするのではない。

それでは『讀賣新聞』が火口大探検とそれを廻る一大キャンペーンが狙いとした三原山患者の防止という目的は達成されたのであろうか。われわれは統計数字へ急ぐまえに『讀賣』自身の紙面に現れた「三原山患者」に関する記事の見出しを拾ってみよう。たとえば七月には次のような見出しが踊っている、月日は掲載紙面

・「さくら丸から女二人投身」(七月三日)

・「第二『死の立會人』匪賊討伐の勇士 御神火自殺を遂ぐ」(七月五日)

・「投身二女身許」(七月五日)

・「美貌の友・相抱き 相模灘へ沈む 同性愛の交換嬢」(七月五日)

・「火口三人心中(未遂)」(七月九日)

- ・「大島で服毒」(七月九日)
- ・「洋酒を呷って酔っ払い 若い女相模灘へザブン」(七月十日)
- ・「気狂の自殺志願」(八〇歳の老人が壺岸島で保護される 七月十日)
- ・「學生風の二人男けさ続いて噴火口へ」(七月十日夕刊)
- ・「三原山を見限り船から相模灘へ」(七月十三日夕刊)
- ・「またも三原山で二名飛込む」(七月十三日夕刊)
- ・「洋服店の番頭、火口で捕まる」(コラム、「話の港」、七月十四日)
- ・「菊丸から投身自殺」(七月十八日)
- ・「御神火自殺の男」(七月十八日夕刊)
- ・「二青年相抱き御神火自殺、船中で共鳴(他に未遂の一人を保護、七月二四日)」
- ・「『奇眼』の青年、天國行志願」(未遂 七月二五日)
- ・「またも三原山へ青年飛込む」(七月二〇日)

以上、『讀賣』の紙面によっても火口投身者は後を絶たなかったことがわかる。事実、九日まで投身既遂は男一一七人、女一二人により一年間に男一三五人、女一四人となった。未遂患者は男五七一人、女一一一人に上がった。

七月以降『讀賣』にとり三原山は目玉商品ではなくなった。次は「日佛拳闘決勝戦」「陸軍大防空展」、恒例の「國技館大納涼祭」

であり「世界初の水中映画撮影」等々と企画はいくらでもあった。しかし、「三原山火口底探検」が『讀賣新聞』にもたらしたものは大きかったに違いない。

「讀賣讀者の殖えること大約五万と云はれ、一時の賣れ行きは平時の十倍に達したと伝えられている。」⁸⁹⁾

昭和七年には発行部数三三万八〇〇〇部だった『讀賣』は昭和八年には四九万〇〇〇部に飛躍し春秋二回にわたり一五万枚刷高速度輪転機を増設、同時に時速四万枚の四色刷高速度輪転機も完成した。⁹⁰⁾

へあとがき

昭和八年の、伊豆大島三原山を中心とする自殺・心中ブームが以上の記述でその全容が明らかになったと主張するつもりは毛頭ない。しかしながら、意識的無意識的な舞台設定者の顔、また状況はいささかなりとも明らかに思ったと思う。ただし、残された課題は多い。そのいくつかを列挙してこの小論を了えたいと思う。

一、自殺者そのものの分析

データの面から、この分析は困難を極める。一つには、自殺者は、後世の研究者のためにデータを残すことなどしないからである。また、警察署も事件がらみの自殺（既遂、未遂を問わず）を除き、記録は残さないからである。さらに、ベースとなる新聞報道でも、記者の推測・憶測によるものが多いと思われるからである。Jack Douglasが Emile Durkheim の自殺論を批判したように、*firsthand* のデータが、信頼性に乏しい場合、いくら統計的な処理を施しても無意味だからである。所詮、この種のテーマは、ブリコラージュで行うより仕方のないものであろう。信頼できそうなケースをパッチワークすることによりそのいくつかの側面を照明できるかもしれない。

二、社会心理の研究

ケースを読んでいくと、現在のわれわれには考えられないような行動に出会う。たとえば、火口を見物している群衆の中から誰か飛び込む勇気のあるものはいないか、という声にに応じてへおれ

が飛び込む」と叫んで火口に飛び込んだケースを見るにつけても、この当時の社会心理の形成とその内実の検討を迫られる。家庭でのしつけ、学校教育、社会教育まで視野に入れた研究が必要になろう。

三、統計的な研究

昭和八年は、すでに『帝国統計年鑑』が出ており、自殺の統計的なデータは一応揃っている。しかし、これらのデータを加工してトレンドを把握しようという試みは意外に少ない。このあたりが、まず着手可能な課題かもしれない。

註

- (1) 引用文は原則として全て旧漢字、旧かな使用のままとするが、一部新漢字を使用。なお、漢字に振られたルビは省略した。
- (2) 現在の東海汽船、同社については後述する。
- (3) 須田教論の誤り
- (4) この昭和八年が、いわゆる「エロ・グロ・ナンセンス」の時代の末期にあたっている。「同性愛」や「同性」がジャーナリズムで市民権を得ていた。たとえば、『婦人世界』昭和八年四月号は、詩人深尾須

磨子の「同性愛を裁く」を題するエッセイを掲載し、次のような広告文を各紙に載せている。

「死の三原山、熱海の結婚解消、婦人の同性愛に対する知識こそ、眞理探求の唯一の鍵・・・同性愛の神祕と、その世界は如何なるものか？それに溺れている彼女達の心理は？何故異性を求めずして同性を求めなければならないのか？さらに同誌の同年十月號も「何故同性を戀するのか？最近の女學生の同性愛問題に触れた大特集」を組み、「どなたも是非読んでいただきたいもの同性愛の恐るべき弊害に何人もおどろくであります。今すぐおよみ下さい」とキヤンペーンをはっている。

なお、大正末期から昭和初期にかけて「特殊風俗文献物の世界に偉大な業績を残した」梅原北明が「度重なる禁圧に対する隠れミノ」として利用した数多くの出版社の一つ談奇館書房は、アルベール原作、花房四郎訳、『同性愛の諸相』を昭和四年四月に発行している。（斎藤夜居、『大正昭和艶本資料の探求』芳賀書店昭和四四年）さらに一世を風靡したドイツの女性だけで製作された映画「製服の処女」（レオンティヌ・ザガン監督）は、昭和八年一月に日本で封切りされている。

- (5) 『東京朝日新聞』は二月十六日付け紙面で「女學生が投げたふたつの渦巻、三原山の自殺と乱酔事件を世人はどう見るか」と題して菊池寛、吉屋信子、三輪田學園園長三輪田元道に批評を求めた。この

中で吉屋信子は、松本貴代子について「現實的になりつつあるといふ現代の若い女性通有の傾向から、遠く離れた生活態度のせん弱な結論だといつてはいけないうか。時代の進むにつれて段々こうした古風な乙女は少なくなりつつあると見ているのですが、廣い世間故、やっぱり一人や二人はいるのしょうね。」と語っている。

- (6) 雨宮甚松は、当時、新聞では「監視人」と呼ばれていた。たとえば『朝日新聞』は二月十五日号では

「彼女「富田昌子——筆者」は、そのまま夢遊病者の様に火口の周囲をのぞきつつ回っていたが、遂に噴火口監視人雨宮甚松の怪しむ所となり同伴されて下山、大島分署に保護されるに至ったものである。」

しかし、彼は正確には御神火茶屋の従業員である。同茶屋の主人・高木久太郎は熱心なクリスチャンで雨宮は高木の命を受けて、いはばボランティアの専従監視員を勤めていたわけである。御神火茶屋監視雨宮甚松、「心理不可解の昌子さん、火口から昌子さんを伴った私の思い出」『婦人世界』昭和八年四月號を参照。

- (7) 事実経過はもっと複雑だった。雨宮によって元村警察署に連れていかれた昌子は、上野署長の尋問を受けたが間もなく釈放された。昌子は署長に付き添われて汽船発着所に急いだところ、発着所前で客待ちをしていた南海自動車の古川運転手が、昌子の横顔を見て、正月九日に岡田から昌子ともう一人の女を元村まで乗せたが、帰りは

昌子一人だった、と証言した。驚いた署長は、急遽、昌子を警察署に連れ戻し、長時間取り調べ、一月九日の眞許三枝子案内事件が明るみに出たのである。山本露敏、「死の三原山案内事件秘録」『婦人世界』同上。

- (8) 二月一四日、午後九時、母親、妹、池田・須田の両教諭に付き添われた昌子は、東京湾汽船の菊丸で霊岸島に到着し、忍町の実家に直行した。詰めかけた報道陣を前に昌子は、貴代子に歌をつくりて大島に行こうと誘われるままに同行したところ貴代子が「私は行き詰った」と言って飛込んだと語った。『東京朝日新聞』二月一五号の記事にもほぼ同じ談話が載っている。これは昌子の警察署での供述とは明らかに異なるだけでなく眞許三枝子の件についても一切触れていない。さらに、富田昌子、「三原山事件の真相―御神火の秘密を曝く」『婦人公論』、昭和八年五月號（文責、記者）の内容とも矛盾する。ここに三人の關係の濃淡の謎を解く鍵があるかもしれない。

- (9) この相違は記者の交待から由来するのも知れない。二月十五日付『讀賣新聞』には「大島元村特電」とあり、十六日付は「津田特派員發電」とある。前者は、大正一三年に『島の新聞』を元村で創刊した柳瀬善之助である。津田特派員は本社から派遣された記者と推定される。なお、一四日付『東京朝日新聞』の記事は東京朝日大島駐在通信員石川武雄と考えられる。「地元関係者のみの女學生火口

投身事件、三原山座談会」『婦人公論』、昭和八年四月號参照。

- (10) 判断の根拠は示されていない。しかしながら、眞許美枝子、松本貴代子が富田昌子の実家に親しく行ったことは事実である。昌子の言によれば

「美枝子は」夏休みなど、必ず私の家へ遊びに来て、一ヶ月近くも忍の城趾へ行ったり、色々語りあったことが頭に浮んで來ます。・・私が美枝子さんのお宅を訪ねた日、美枝子さんが着ていた着物は、いつだったか、私の母が美枝子さんに差上げたものでした。美枝子さんは、三原山にその着物で行かれたのです。」（富田昌子、「三原山事件の真相」『婦人公論』、昭和八年五月號。

松本貴代子も前年の一二月二〇日頃、郷里に帰る富田姉妹及び川島春子と一緒に、埼玉県忍町に行った。春子、昌子、貴代子の「三人共同し柄のお召しの揃いだ。これは、富田昌子の母富田わかが買い、川島家で裾を揃えて仲良しの三人にやったものである。」山本露敏、「死の三原山案内事件秘録」

- (11) この無名の丘に、当時、大磯在勤の唯一人の新聞記者『東京日日新聞』大磯通信員、岩森伝は、「坂田山」と名付けていたいきさつを次のように語っている。

「最初私は、美しい心中事件があったといふので、この山の名前はなんといいようかと調べたところが、無名の山なんです。強いていふたら『八郎』とかいった山だというような声が出て、すぐ役場に

- とんでいって、その付近の地図を調べたんです。すると駅の近くに坂田、小字坂田という、本当に虫めがねで見るとような小さいところがあったんですよ。それだと思ひまして、その名前、坂田という名前を頂戴しまして、それから『坂田山心中』にしちゃったわけです。」吉川重男、岩森伝、五所平之助、「天国に結ぶ恋」——坂田山心中始末期『証言私の昭和史1昭和初期』、旺文社、一九八四年
- (12) 前掲書。
- (13) 八重子の死体が発見された時のマスコミの最大の関心の一つは彼女が処女であるかという点に絞られていた。横浜地方裁判所の嘱託医・藤井医師がブリ小屋で検案しているあいだ数十人の記者が小屋を取り囲んでいた。同医師が小屋から出てくると記者団は一斉にこの質問を浴びせかけた。それに対して藤井医師は一言
「彼女の身体はきれいだった」
と答えた。
- (14) 受信機は安いもので十数円(昭和八年六月十六日付『東京日日新聞』掲載の「赤門ラジオ」の広告参照)から、一〇〇円、二〇〇円とする電気蓄音機(昭和六年五月一日付『東京朝日新聞』掲載の「三田式ラジオ」の広告参照)まであった。ちなみに昭和八年の大卒新入社員の初任給は平均六二円、昭和七年の職業婦人の平均月収は三〇円七五銭、同年の新聞配達(住み込み)は月収五円であった(岩崎爾郎、『物価の世相一〇〇年』、読売新聞社、昭和五七年。
- (15) ラジオ放送の自殺関連番組は、新聞の番組欄で見ると限り、昭和八年一年間を通じて二、三件しかない。その一つの例が、五月二八日にJOAKで放送された
東北帝國大學醫學博士丸井清泰「自殺者心理診断」
である。
- (16) 『讀賣新聞』が紙面一面を使ってラジオ番組欄を設けて以来、各社はこれに倣った。さらに歌謡曲の歌詞も番組にしばしば掲載された。
- (17) 倉田喜弘、『日本レコード文化史』、東京書籍、昭和五四年。
- (18) もっとも島の住民にとっては御神火を死穢により穢がされていること、さらには、うなぎのぼりに増大してきた観光客が減少することを恐れたのであろう。
- (19) 富田昌子、「三原山事件の真相——御神火の祕密を曝く」
- (21) 文学、政治、社会、風俗批判の各分野で健筆を振っていた評論家・杉山平助は「近代的企業として成立し得る雑誌は主として総合雑誌、大衆雑誌、婦人雑誌の三部門によって占められる」と考えた。杉山平助、「雑誌界の諸相と支配傾向(上)(下)」『讀賣新聞』、昭和八年一〇月一五日(夕刊)、一六日(夕刊)当時の婦人雑誌が占めるウエイトについては、尾崎秀樹、宗武朝子、『雑誌の時代その興亡のドラマ』主婦の友社、昭和五四年。高崎隆治、『一億特攻』を煽った雑誌たち文藝春秋・現代・婦人倶楽部・主婦之友』、第三文明社、

- 一九八四年。私たちの歴史を綴る会／編・著、『婦人雑誌から見た一九三〇年代』、同時代社、一九八七年。を参照。
- (21) 『旅程と費用概算』、ジャパン・ツーリスト・ビューロー、昭和五年
- (22) 『全国時刻表一九八六年五月号』、日本交通公社、但し、竹芝栈橋を夜一〇時に出る船は昭和八年当時と同様に午前五時半に元町に着く。
- (23) 松木國次郎、「大島航海の今昔(上)」、(下)、『島の新聞』、昭和十三年六月五日、六月十九日、覆刻『伊豆大島の新聞』、伊豆大島志考刊行会、昭和六〇年八月一日
- (24) 以上の記述は主に『東海汽船株式会社社史』、昭和四五年、によっている。
- (25) 佐高信、『失言恐慌東京渡辺銀行の崩壊』、駸々堂、昭和六二年参照。
- (26) 東京湾汽船会社社長、林甚之丞、「観光大島開発座談会(三)」、苦心開拓の十年将来の抱負と使命(一) Ⅱ三原山の雄大に感激『島の新聞』、昭和一二年二月二二日
- (27) 『島の新聞』、昭和三年二月十六日
- (28) 同、昭和三年三月六日
- (29) 前掲書
- (30) 松木國次郎、「大島研究資料を解く(二)」、(三)、『島の新聞』、昭和八年六月六日、六月十六日
- (31) 「大島研究資料を解く(四)」、『島の新聞』、昭和八年七月六日
- (32) 同、昭和四年九月六日
- (33) 同、昭和九年九月二六日
- (34) 長尾直、『流行歌のイデオロギー』参照。なお「波浮の港」が最初に登場した『婦人世界』第十九巻第六号では一番と二番だけであり、次に山野楽器店発行の楽譜では三番、四番が付け加わり、ビクター発売のレコードでは五番が付け加わっている。豆南生、「民謡波浮の港の舞踊と映画(一)」、(四)、『島の新聞』、昭和四年五月六日、七月十六日参照
- (35) 『東海汽船社史』
- (36) 『レコードの文化史』
- (37) 『島の新聞』、昭和四年三月一六日
- (38) 辻厚生、西山卓編、『昭和初期流行歌歌詩集、昨日・今日・明日に歌う』飛鳥書房、一九八四年
- (39) 『東京日日新聞』、昭和八年六月二七日
- (40) 『島の新聞』、昭和一一年八月九日
- (41) 『東京日日新聞』、昭和八年三月一六日
- (42) 『東京日日新聞』、昭和八年四月三十日
- (43) 『東京日日新聞』、昭和八年五月一日
- (44) 『東京日日新聞』、昭和八年五月二六日、作詞者、作曲者名なし。
- (45) 同に同じ
- (46) 『東京朝日新聞』、昭和八年五月二六日
- (47)

- (48) 六月発売のこのレコードは、松竹映画「処女よ、さようなら」の主題歌である。『昭和初期流行歌歌詩集、昨日・今日・明日に歌う』参照。
- (49) 『東海汽船株式会社社史』、『島の新聞』、昭和六年八月六日参照。
- (50) 伊豆諸島東京移管百年史編さん委員会編『伊豆諸島東京移管百年史』（下巻）東京都島嶼町村会、昭和五六年三月三〇日
- (51) 同日の『東京日日新聞』のラジオ、流行歌として「ハア色も香もおぼこそだちの島つばき無理にさかせてあとで泣かせる旅の風」と歌詞の一部が紹介されている。
- (52) いずれも『東京日日新聞』、昭和八年七月六日
- (53) 7月発売、『昭和初期流行歌歌詩集、昨日・今日・明日に歌う』
- (54) 『東京日日新聞』、昭和八年八月二二日
- (55) 『東京朝日新聞』、昭和八年八月一三日
- (56) 『東海汽船株式会社社史』
なお日本全体のこの時期のマスレジャー、とりわけ旅行については稿を改めて論ずる必要がある。
- (57) ここでは、ともすると暗黒の恐慌期、ファシズムの抬頭期と一色に塗りつぶされがちなの時代のさまざまな社会現象を具体的な事実、状況によって微視的に腑分けしていく必要を指摘しておこう。
- (58) 昭和八年の自殺・心中ブームにしても「迫り来るファシズムの足音に脅えて」という表現がしばしば見られる。もちろん、日本はファシズム（日本型ファシズム）に突入していくのだが、「一五年戦争」などの概念形成により、必然性を云々することは怠慢のそしりを免れまい。微分そして積分による再構成こそ必要とされている。
- (59) 未遂とは、警察に保護された者を指す。その多くは放置するならば自殺したものと推定される。
- (60) 『東京朝日新聞』、昭和八年四月二六日
- (61) 『一九八三、百科年鑑』、平凡社、一九八三年
- (62) 『島の新聞』、昭和八年三月二六日
- (63) 『東京朝日新聞』、昭和八年三月二六日
- (64) 『東京日日新聞』、昭和八年三月七日
- (65) 『読売新聞』、昭和八年五月二二日
- (66) 『読売新聞』、昭和八年五月二二日
- (67) 『読売新聞』、昭和八年五月二二日
- (68) 『読売新聞』、昭和八年五月二六日
- (69) 『読売新聞』、昭和八年五月二七日、夕刊。
- (70) 『島の新聞』第三七六号、昭和一〇年一〇月二七日
- (71) 同、五月二九日、なお島のアンコは、数日前から同神社に成功祈願の参拝をしている。さらに二六日勢揃いした二〇余名の探検隊も元村の吉谷神社に参拝している。同、五月二七日、二七日夕刊参照。

- (71) この記述で浅間山、日光（華巖の滝）がでていることに注目すべきであろう。浅間山の噴火口への投身自殺は明治四三年に「東京からきた夫婦が自殺して大評判になって以降増える一方だった」（事件・犯罪研究会編、『明治、大正、昭和、事件・犯罪大事典』、東京法経学院出版、一九八六年、五九〇ページ）「投身者二五〇人の霊をまつるため、浅間山上で一大慰霊祭がおこなわれたのは昭和のはじめであった」（山名正太郎、『自殺について』、北陸館、昭和二十四年、一三〇ページ）
- なお、阿蘇山火口の投身者について、山名正太郎は同書で「同じ昭和八年一月から八月まで、既遂二〇〇人、未遂四〇〇人といわれているが確かではない」としている。同、二二五ページ。
- 日光の華巖の滝が自殺の名所となったのは言うまでもなく明治三六年五月二三日の一高生藤村操の投身に始まる。
- (72) 前掲「死の登山に同伴した目げき者の座談会」は大正一三年とし、『読売新聞』昭和八年五月二五夕刊は「誰ぞ名案はない御神火自殺の先駆は昭和五年」としているがいずれも誤り。
- (73) (15)の「座談会」に同じ。
- (74) (71)の『讀賣新聞』
- (75) 山名正太郎、前掲書、一九〇〜一九一ページ。
- (76) 西条八十、「わが大島禮讚の記」『島の新聞』、昭和一〇年一月三日、『読売新聞』昭和八年五月二九日夕刊
- (77) 『読売新聞』昭和八年五月二九日夕刊
- (78) 同、五月二一日。なお探検成功の二九日「よみうり号」は列風のため吊り下げ作業はあきらめ、「砂漠」に着陸、写真原稿を受け取り東京に向かった。ところが発動機故障の為空中滑走により熱海線根府川駅前の海岸に不時着。列車で写真原稿を本社に届けた。『讀賣新聞』昭和八年五月三〇日。
- (79) 『讀賣新聞』昭和八年五月二六日
- (80) 『讀賣新聞』昭和八年五月三〇日
- (81) (80)に同じ
- (82) 『讀賣新聞』昭和八年五月三〇日
- (83) (82)に同じ
- (84) (82)に同じ
- (85) 岩田得三「地獄の三原山火口底探検記」『讀賣新聞』昭和八年六月一日
- 日
- (86) すでに『讀賣新聞』四月一六日夕刊には「佛の三大拳闘選者訪日の途に上る！嵐の大歡呼に送られ乗船マルセーユを發つて」の記事が掲載されている。日本側代表選手決定のため四月二五日、二七日、日比谷新音楽堂で全日本選抜。拳闘大会が実施された。五月一三日には同準決勝戦が同じく日比谷新音楽堂で、同二三日には決勝戦が両国国技館で行われた。これに先立ち同二〇日には三拳豪が神戸に上陸している。そして六月五日、一二日の両日、同両国国技館で「日佛拳闘大試合」が開催されている。

つまり、大探検の直後に別の目玉をもってくるように着々と準備していたわけである。

(87) 無視するどころかこの企画を横取りしようとする社まで現れた。

『伊豆大島の新聞』昭和八年五月六日には次の記事が見られる。

「四月三十日時事新報記者二名三原山火口探検、北東傾斜面を利用して一五米ばかりの繩ばしごで防毒マスクをかけ降下したが見物人は期待してただけにインチキだと云っていた。」

また昭和八年四月末に『時事新報』の主筆を辞任し退職した伊藤正徳は次のように語っている

「今年五月、三原山の噴火口探検に就いて時事と讀賣が争ったなどは其一例だ。一方が其計画あるを探知するや、他方が此を先取りする為、ともかくも一足先に火口に足を入れて圧倒的な大活字の記事を揚げ、前者が其不道徳を論難しつつ、後からヨリ組織的に計画を遂行したいという話である。私は、執れが先に計画し、執れの言い分が正しいのか、それを詮索する必要を感じない。ただ、新聞社の競争が、こんな点まで発展していることを、有害の一例として採用すれば足りるのだ。」(伊藤正徳、『新聞生活二十年』、中央公論社、昭和八年二月五日、三六四ページ)

(88) プロキノを記録する会、並木晋編、『プロキノ』全史』、合同出版、一九七一、また『東京日日新聞』、昭和八年五月一日には次の広告が載っている。

「パターベビー 九ミリ半 小型活動

モトカメラ F35 A型 百九十五圓

B型 百十五圓

生フィルム 一本 一圓四五

同スローパン 二圓八〇

(F三五カメラで天然色可能) 寫眞店、百貨店にあり、經費低廉他に比なし」

(89) 『島の新聞』昭和九年二月一六日

(90) 『日本新聞販売一〇〇年史』